

# 日本人男性同性愛者における性的指向性の 受容過程に関する一研究

津 野 千 文

臨床心理学研究 東京国際大学大学院臨床心理学研究科 第16号 抜刷  
2018年（平成30年）3月31日



# 日本人男性同性愛者における性的指向性の 受容過程に関する一研究

津 野 千 文

## 目 次

- I. 研究の背景と意義
- II. 研究の目的
- III. 研究の対象
- IV. 研究の方法
  - 1. 研究デザイン
  - 2. 研究期間
  - 3. データの収集方法
  - 4. 質的データの分析方法
- V. 結果および考察
  - 1. 性に目覚めるころ
  - 2. 同性愛者の人たちがかかえる困難や混乱、葛藤について
  - 3. 性的指向性の受容と性的アイデンティティの確立にむけて
- VI. 今後の課題

## 要 旨

本研究論文の目的は、日本の男性同性愛者の人たちの性的指向性の受容過程を明らかにし、それに関する理論的仮説を構築することである。情報化社会の昨今、LGBTと呼ばれる人たちは、昔とくらべ今では、より快適な環境のもとで生活しているようにみえる。しかしながら、日本の男性同性愛者のほとんどすべての人たちが、これまでに異性愛者の役割葛藤や抑うつを経験してきており、そして今もなお経験し

ていると言われている。調査を行なうための質問紙を独自に作成し、12名の被験者が本研究に参加した。被験者の人たちと著者とのあいだでデータのやりとりをするために、電子メールを使用した。また、収集したすべてのデータを質的に分析するにあたり、SCATを利用した。このSCATを用いてデータを分析した結果、日本の男性同性愛者の人たちのほとんどが、みずからの性的指向性を受容するにあたり、6つの段階をふんでいくことがわかった。だが、彼らのほとんどは、おそらく、5番目の段階、すなわち選択的カミング・アウトの段階にふみとどまっているようである。

キーワード：LGBT、異性愛社会、性的指向性、受容過程、異性愛者の役割葛藤、SCAT

## I. 研究の背景と意義

生物学でいうところの有性生殖や、人間社会全般にみられる結婚という制度を慮るならば、有性生殖の場合には、雄と雌が交尾をすることによって、はじめて子孫を残すことができるというのが大前提であるし、結婚制度においても同様に、愛し合う男と女がいっしょになって、子どもをつくり、家庭を築いていくというのが通常である。したがって、異性愛者の人たちが、性的指向性 (sexual orientation) の受容や、性的アイデンティティの確立において、悩むな

---

\*臨床心理学研究科 博士課程 (前期)

どということはずまいといえる。

それでは、性的マイノリティである同性愛者の人たちの場合は、どうだろうか。

情報化社会の昨今、同性愛に関する情報も巷に溢れており、みずからの性的指向性を受容し、性的アイデンティティを確立していくのに、さほど困難を伴わなくなったかのようにみえる。たとえば、2015年11月5日から、東京都渋谷区と世田谷区では、生活を共にする同性カップルを夫婦と同じような関係の「パートナー」と認める制度が開始されるなど、性的マイノリティの人たちにとっては朗報といえる動きも出はじめている。

だが、たとえば、日高庸晴(2006a)は、「同性愛に対する社会的な差別や偏見、暴力を恐れ、多くのゲイ・バイセクシュアル男性は自分の性的指向を公に打ち明けることは少なく、同性愛者としての社会的役割を担い、社会生活を送っている」として、これを「異性愛者的役割葛藤」と命名し、同性愛者の人たちの異性愛社会での生きづらさを述べている。

さらに、多くの同性愛者たちは、異性愛者であれば経験することはないであろう数多くのライフイベントを経験していると考えられる。日高(2006a, 2006b, 2007)によれば、そのようなライフイベントは、とくに思春期に集中して発生しているという。たとえば、「周囲の友だちが「異性のこと」や「好みの女性のタイプ」などを話し始める頃に、「男性に対して性的魅力を感じる」自分自身について不安や戸惑い、違和感を覚えることが多い」と彼は述べている。

その好例が石川大我さんであろう。

「しかし、学年が進むにつれて、どうやら、自分の気持ちはその「ホモ」であるということがわかってきた。そしてそれは「同性愛」であるということも。そして、決して誰にも言えない秘密を抱えてしまった、と一人悩んだ」(石川大我, 2009, p. 52)

「さてさて、高校生になって困ったことが起きた。それは恋愛が具体的になってきたということだ。一中略一気になる女のコが一人

もいないようじゃ、昼どきの会話がもたない。ここは「気になる女のコ」というヤツを設定せねばクラスの「爪弾き者」になりかねない。」(前掲書, pp.83)

というふうに、自分の中・高生時代をふり返っている。

ところで、石丸径一郎(2008b)は、「第二次性徴を迎える思春期の頃には社会的困難やアイデンティティの危機を体験することも多いが、それをうまく乗り越え、克服することができれば、通常は特に援助を必要としないで生きていくこともできる」と述べている。すなわち、同性愛者の人たちは、思春期の頃にはみずからの性的指向性に途惑い、悩みながらも、いつかはそれを克服し、乗り越えて、今を生きているということになる。したがって、そこには、みずからの性的指向性を受容するにあたり、段階(ステップ)が存在するのではないかと推測するのは不自然ではあるまい。

海外では、過去数十年のあいだに、同性愛者の性的アイデンティティの形成過程に関して、いくつかのモデルが提案されてきた。たとえば、ヴィヴィエンネ・キャス(Vivienne C. Cass)(1979, 1984)や、リチャード・トロイデン(Richard R. Troiden)(1989)らの先行研究がある。

日本においては、堀田香織(1998)が学生相談の経験知から、男子大学生の同性愛アイデンティティ形成のプロセスについて考察した研究や、梶谷奈生(2008)のような、女性の同性愛者の自己受容過程における課題について探索的に行った研究がある。また、HIV感染の問題や、周囲の人たちへのカミング・アウトの問題といったように、日本国内における男性の同性愛者や両性愛者が抱える問題や深刻な現状などを調査・報告したものは存在する(たとえば日高ら, 2007)。だが、同性愛者や両性愛者を対象にした、みずからの性的指向性の受容過程に関して研究したものは、日本では数少ないのが現状である。したがって、たとえば、カウンセリングなどで同性愛に悩む人たちに対する心理

的援助を行うにあたり、同性愛者の人たちが、実際にみずからの性的指向性をどのように受容していくのか、あるいは受容していったのか、その過程を研究することは、意義深い。

## II. 研究の目的

日本人の男性同性愛者の性的指向性の受容過程全般を明らかにし、その理論的仮説を構築する。

## III. 研究の対象

男性の同性愛者、いわゆるLGBのうち、G(ゲイ)に該当する日本人で、研究への参加協力の同意を得られた人。年齢層は、日本社会において成人とみなされる20歳以降とする。また、性同一性障害 (gender identity disorder : GID) に該当する人は除く。なぜならば、同性愛は、性的指向性 (sexual orientation) の問題であるのに対し、性同一性障害は、みずからの生物学的性別と自己の性認識の不一致が問題となるのであり、扱う問題の次元が異なるからである (山内俊雄, 2004, pp.21-24)。

## IV. 研究の方法

### 1. 研究デザイン

日本人の男性同性愛者がみずからの性的指向性を受容していくのにあたり、そこにはなにがあるのか、どのような問題が生じてくるのか、それに対して、彼らはどう感じ、どう対処していくのか、そして、全体としてどのような段階をふんでいくのかなどについて考究していく質的研究である。

なお、本研究を行うにあたり、東京国際大学学術研究倫理審査を受け、その承認を得ている。

### 2. 研究期間

2016年4月～2016年11月

### 3. データの収集方法

以下の方法で、データを収集した。

- ①男性同性愛者の性的指向性の受容過程に関して、理論的仮説を構築するための質問紙を独自に作成した。その具体的な質問内容は、以下のとおりである。

#### ★ 質問事項 ★

1. あなたが、異性ではなく同性 (男性) に性的魅力を感じたのはいつごろですか？
2. 同性 (男性) に性的魅力を感じる自分に気づいた理由は何ですか？
3. 同性 (男性) に性的魅力を感じる自分に気づいたとき、あなたはどう思いましたか？
4. 同性愛者であることによって、これまでに日常生活上で困ったことがありましたか？
5. 4でYesだった人は、どのようなことで困ったのですか？
6. 4でYesだった人は、その困ったことをどのように解決しましたか？
7. 同性愛者である自分を、これまでにいやになったことはありますか？
8. 7でYesの人も、Noの人も、その理由を書いて下さい。
9. 7でYesだった人 (つまり、同性愛者である自分をこれまでにいやになったことがある人) は、今でも同性愛者である自分がいやですか、それともいやではありませんか？
10. 9の理由を書いて下さい。
11. 自分が本当に同性愛者なのかどうかを、なんらかの方法で確かめようとしたことはありますか？
12. 11でYesだった人は、どのような方法で確かめましたか？
13. 同性愛を治療しようと思って、医療機関やカウンセリングなどにかかろうと考えた、あるいは実際に医療機関やカウンセリングなどにかかったことがありますか？
14. 13でYesだった人は、その後どうなりましたか？
15. 同性愛者である今の自分を受け入れている人は、どうして受け入れようと思ったのですか？
16. 15に関連して、同性愛者である今の自分を受け入れている人は、そうしようと思った何かきっかけがありましたか？
17. それはどのようなきっかけでしたか？

18. もし生まれ変わるとすれば、また同性愛者として生まれたいですか、それとも今度は異性愛者として生まれたいですか？
19. 18の理由を書いて下さい。
20. 家族や友人、あるいは職場の同僚といった身近な人たちにカミング・アウトしていますか？
21. 20でYesの人も、Noの人もその理由を書いて下さい。
22. その他、お書きになりたいことがあれば、なんでも自由に書いて下さい。

② 研究協力者に対して、①で作成した質問紙を用い、電子メールを利用した調査を実施した。なお、この電子メールによるやりとりは、研究協力者ごとに数回行った。

#### 4. 質的データの分析方法

SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて、協力者の人たちから送信されたデータを分析し、そこから得られた結果を基礎にして、日本人の男性同性愛者が性的指向性を受容していく過程に関する理論仮説を構築した。

SCATとは、名古屋大学大学院教授の大谷尚(2008, 2011)によって開発された、質的データの分析の一手法である。具体的手順は、以下の通りである。

表の中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、

- ①データの中の着目すべき語句
- ②それを言いかえるためのデータ外の語句
- ③それを説明するための語句
- ④そこから浮き上がるテーマ・構成概念

の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。<sup>1)</sup>

### V. 結果および考察

全部で14人の方々に研究の協力者になってもらうことができた。しかし、このうちCさんとHさんは、研究の対象者から除外した。その理由は、Cさんの場合は、イギリス人であったためであり、Hさんの場合は、Hさん自身も書いているとおり、本研究の対象者であるための

条件である「男性の同性愛者、いわゆるLGBのうち、G(ゲイ)に該当する人」にあてはまるのかどうか疑問が残ったためである。

したがって、12名(Aさん・Bさん・Dさん・Eさん・Fさん・Gさん・Iさん・Jさん・Kさん・Lさん・Mさん・Nさん)の研究協力者からのデータをSCATにかけて質的分析を行った。

研究の結果から、12人の研究協力者のすべての人たちが、紆余曲折がありながらも、みずからの性的指向性を受容することができていたといえる。

これから、彼らがどのようにしてみずからの性的指向性を受容していったのか、その過程を時間軸に沿って説明していきたい(ただし、2のiからviiにおいては、SCATによる分析の結果、質的データから抽出された諸概念を中心に説明する)。研究協力者の人たちが、実際に書いて送ってくださった内容は【 】で括り、本研究において重要と思われる概念を表現する語や句は< >で括ってある。なお、ここで述べられる内容はすべて、理論的に飽和がおきたものである。

#### 1. 性に目覚めるころ

12人の研究協力者の人たちが、異性ではなく同性(男性)に対して性的な魅力を最初に感じた時期は、幼児期から思春期にかけてであった。

当初、同性(男性)に対して性的魅力を最初に感じた時期は、性に目覚める思春期に集中するはずと予想されたが、結果はそうではなかった。Bさんのように【小学校時代や小学生以前は性の経験は全くなかった】という人もいるが、Aさん・Dさん・Eさん・Fさん・Gさん・Lさん・Nさんは、フロイトのいう男根期や潜伏期にあ

りながらも、同性に対して性的な興味をいだき、さらには性的な行為におよんだ人もいる。ただし、そのような性的な行為は、【意識的に身体的な接触をしていました。】と書いているEさんや、自分から進んで行動をおこしていたDさんやLさんといった例外も存在するが、しかし、たいていの人たちの場合は、自発的あるいは能動的に行われたものではない。それとは逆に、身近かにいる成人男性や、年上の少年たちの誘惑によって、あるいは、GさんやNさんのように映画やテレビ番組などで、ヒーローが敵にやっつけられているサディスティックな・マゾヒスティックなシーンによって、性的な興奮を覚えたというふうには、受動的になされたことは注目すべきことである。周囲の成人男性や年上の少年の存在と身体的な接触の継続とが、小児性欲を刺激し、維持させたものと考えられるし、またDさんのように、書物に載っている男性の裸体像や、生殖器の解説図などから、性的な刺激を受けることもあるのだろう。<sup>2)</sup>

●Aさん：

【自分が男性に興味があるのを感じた最初は小学校の2年生から3年生にかけて。】

【小学校の警備員（当時は同じ団地に住んでました）に誘われるがままにキスされたり、局部の見せ合いや相互マスターベーションをしてもイヤではなかった。】

●Dさん：

【かなり幼いころ、小学校に上がる前からぼんやりと関心をもっていたように記憶している。】

【近所にあった柔道場の中学生のお兄さんたちが着替えるところを入り口からじっと見ているのが好きだったのを思い出す。】

【10歳ごろに、家にあったギリシア美術の本も、男性の裸体像が載っているページだけ選んでページをめくることがあった。】

【また、当時、百科事典の男性器に関する医学的な解剖図が載っているページに非常に興奮したのも覚えている。男性器のペー

ジは、説明を覚えこむぐらいに何度も見ていた。】

●Eさん：

【小学校1年生、6歳のころ。】

【近所に住む同じ小学生のお兄ちゃんたちが大好きだったから。】

【性的対象として好きでした。】

●Fさん：

【5歳ころ】

【ペニスに興味を抱いたから…？】

【一回り以上離れた当時19歳位の従兄が、一緒に寝ている時にいじらせて、大きく硬くさせたことが大きいと思います。】

●Gさん：

【小さい頃ヒーローものの番組などを見ていて、たくましい男性主人公が悪者に捕えられて痛めつけられているのを見て興奮を覚えたので、それが最初かもしれません。】

【多分3歳とか。】

●Lさん：

【自覚は無いが、幼少期の頃から。】

【保育園のときに、年上の男の子を追いかけていたり、友人のお兄さんの勉強机の椅子にはおずりしていた記憶がある。】

【小学校4年生のときは、担任の男性教諭に強く惹かれて、写真にキスをしたり、ジャンパーのにおいをかいだりしたことがある。】

●Nさん：

【私はSMの嗜好も有しているが、自分のそういう性癖として最初の記憶としてあるのは、多分自分が幼稚園か小学校低学年の時の経験である。】

【その映画の中で少年の赤胴鈴之助が悪漢に捕まり、縛られて梁から吊るされる場面があった。なんとその部分だけ、いまだに記憶が鮮明に残っているのである。】

ここで疑問に思うことが一つある。それは、男根期なのであればいさ知らず、潜伏期に入ってから、子どもはみずから進んで性的な行動に走るものなのだろうか。このことに関して、

フロイト（1905）は、潜伏期における小児性欲に関して、次のように述べている。

「さらにわたしたちは、これまでの経験から、誘惑という外部の影響によって、予定よりも早い時期の潜伏期の中断が引き起こされ、場合によってはその時点で潜伏期が廃棄されてしまう可能性があることを確認することができた。こうした場合、子供の性欲動は、事実として多形倒錯的なものとして現れてくる。さらに言えば、こういった予定よりも早い時期の性活動は、それがどんなものであっても、子供を教育する可能性を傷害するものとなる。」（Freud, S. / 渡邊俊之（訳），2009, p. 299）

したがって、潜伏期にある子どもが性への興味をいだき、性的な行為にまでおよぶことは、周囲の成人男性や年上の少年の存在、および身体的な接触が継続するという条件のもとでは、十分にありうることなのである。

しかしながら、同性との性的な行為におよびながらも、そのことと同性愛とは、AさんやFさんたちのなかでは、直接に結びついてはいない。むしろ、性というものに対する無邪気さや純粋さ、あるいはあどけなさのようなものがある。ただし、Aさんの場合は、【子供心にも「これは人には言ってはいけないこと」と薄々感じたんだろうね】と書いていることから、成人男性との性的な行為に後ろめたさのようなものを感じているようだ。

ところで、アンナ・フロイト（1965）が、男根期の子どもたちが示す行動でもって、その子の将来の性的アイデンティティを予測することが可能である、と述べていることは興味深い。「概して、男根エディプス期にある子どもの行動は、それ以外の時期よりも性的な役割と性的対象の選択に関し、彼の将来の傾向をより明確に予示しているといえる。」（Freud, A. / 黒丸正四郎・中野良平（訳），1981, p. 159）。

だが、Aさん・Dさん・Eさん・Fさん・Gさん・Lさん・Nさんのように、男根期や潜伏期

といった早い時期に同性愛傾向（ここではまだ「傾向」である）に気づいた子どもであっても、それを明確に同性愛として同定するには、やはり思春期を待たねばならないのだといえよう。同様のことを、フロイトも、つとに述べている。

「最終的な性行動のありようは、思春期のあとになってようやく決定される。それは、一部は体質的なものであり、一部は偶然的なものであるような、いまなお見通すことのできないたくさんの要因の成果なのである。」（前掲書, p. 185）

Aさん・Dさん・Gさん・Nさんは、次のように書いている。

●Aさん：  
【高校生の頃、乗り換えの駅のトイレに入っていたら、隣の人が局部を見せてきたり、2人きりになったら触り合ったり、隙を見て個室に入って行為に及んだ。これがゲイと自覚したきっかけだった。】

●Dさん：  
【中学生になると、自分は「同性」に興味を持つ特別な（異常な）存在なのではないか、という自覚が生まれ始めた。】

●Gさん：  
【はっきり「これは男性に性的魅力を感じている」と思ったのは、やはりマスターベーションの時に思い浮かべるのが学校の体育の先生などすべて男性だったからだと思います。】

【中学1年生のころだと思います。】

●Nさん：  
【男性そのものに興味を持ったのは中学校2年生の時、一年先輩の男の子にあこがれた。】

このように、思春期に入る以前に、同性に対して性的な魅力や興奮を感ずるようになる段階を<性への目覚め>の段階とする。

次に、Bさん・Iさん・Jさん・Kさん・Mさんは、思春期に入るときや、思春期に入ってから、はじめて同性に対して性的な魅力や興奮を

感ずるようになる。ただし、ここでも、学校の体育教師など身近かにいる力強い成人男性の存在が、同性に対して性的な魅力を感じると自覚することに関与していることは看過できない(Iさんの場合は、同級生であったが)。

- Bさん：  
【中学2年くらい】  
【体育の先生や同級生に目がいったから。】
- Iさん：  
【小学5年生頃】  
【男の子の友達がコケて押し倒された形になり、その時に修学旅行で見た裸が浮かんできた。】
- Jさん：  
【小学校6年の頃。いわゆる初恋の頃です。】  
【今まで感じた事のないドキドキ感がある男性に感じ、彼を考えながらオナニーしたのを覚えています。】
- Kさん：  
【中学1年生の頃】  
【運動部に入っていた彼の颯爽とした姿や汗の匂いにうっとりしている自分を意識した。】
- Mさん：  
【自分が同性に性的魅力を感じたのは、中学2年生(14歳)の時です。】  
【気づいたきっかけは、電車の網棚に置き忘れていた雑誌がホモ雑誌『薔薇族』で、思わず持ち帰って読んだことだと思われまます。】

Mさんが、実在の成人男性や年上の少年、あるいは同性の同級生からではなく、雑誌などの記事といった「物」から性的な刺激を受けたが、これはDさんと同様である。Dさんも、書物に載っている男性の裸体像や、生殖器の解説図などの「物」から、性的な刺激を受けたのだった。

## 2. 同性愛者の人たちがかかえる困難や混乱、葛藤について

同性愛者の人たちは、＜性への目覚め＞に

よって、だんだんと同性に対して性的な魅力や興奮を感じる自分に気づいていくのだが、これにともなって生ずる彼らの困難や混乱、葛藤、および孤独感などについて、これからiからviiにわたって、詳述していく。

### i. 周囲との齟齬をきたすこと

学年が進むにつれてものごころつくころには、換言すれば、異性愛中心主義の社会に感化されるにつれて、同性愛者の人たちは、みずからの性的指向性に関して「自分を変じゃないか」「自分はまわりの人たちとはちょっと違うんじゃないか」というふうに、周囲との齟齬をきたしはじめる。また、自分が同性を好きなことは隠しておいたほうがよいという気持ちをいだきはじめ、不安になる。隠す理由としては、同性愛者はいじめや差別の対象となりうるからであり、また、良好な人間関係を構築し、維持するためでもあると考えられる。同様のことは、室井舞花さんも述べている。

「同性を好きになることや、男・女らしくない人は、からかわれたり、いじめの対象になる」からである(室井舞花, 2016, p. 10)。

- Bさん：  
【同性愛者だとカミング・アウトすることで、友達関係が崩れるのではないかと考えていました。】
- Dさん：  
【思春期以降、性に関しては、周囲の流れと決定的に違うのだと気づいた時は、大きなショックと孤独感があった。まず、このことは絶対に外に漏れてはいけなくて、と固く思った。】
- Eさん：  
【どうやら他の子と自分は違うみたいだなあ。】  
【他の男子は女子を好きになるみたいだなあ。】
- Jさん：  
【G男性が差別の対象になっている事を

知ったのは高校1年になってそのような話題が出始めてからです。それからは、そのような自分を出さないように気を付けなくちゃと思い、そうするようになりました。】

●Lさん：

【自分が異質で人に言っではいけないということや、なんとなく気づいていくうちに、どうしようどうしようと焦っていた。】

## ii. <異質である不安>

このように、ほとんどの男性の同性愛者の人たちは、みずからの性的指向性を自覚するにおよんで、「そんなはずはない」とか「ふつうとはちがう」とかいう感覚をもって不安になる。たとえば、キャスは、他人とはちがっている自分に対するこのような不安の状態を‘alienation’とよんでおり、「個人が、自分は他人とはちがっていると、自己に対してよそ者であると感じる程度」と定義している。また、トロイデンは、‘marginality’という単語を使用し、「自分が同性を好きであるということは、この社会では主流ではなく辺境にいる」という同性愛者の人たちの境遇を表現している。さらに、同性愛者であることを公にしている精神分析医のリチャード・イサイ (Richard A. Isay) は、‘outsider’ や ‘peripheral’ という単語を使用し、同性愛者の人たちの置かれた孤立した状況を次のように述べている。

「よそ者・のけ者のように感じながら、同性愛者である若者たちは、親離れをするためにも、そして、まわりから受け入れられていると感じられるためにも、この時期には、仲間たちの存在が必要不可欠になってくるのだが、その仲間たちの輪の中には入れず、しばしば周辺のままであり続けるのだ」(Isay, A. R., 1996, p. 64)

本論文では、この同性愛者の人たちのいまだく孤立した感情を<異質である不安>とよぶことにしたい。この<異質である不安>をなんとかして解消しようと、EさんやLさんのように、男性の同性愛者の人たちは悪戦苦闘するのである。

●Eさん：

【大学2年生のときに試しに女子と付き合ってみたが、手もつなげなかった。】

●Lさん：

【こうだったらな、こうじゃなかったらな、と空想の世界を思い浮かべては慰めていた。】

さらに、イサイは、次のように述べている。「公けにカミング・アウトを行っているスポーツ選手や、政治家、俳優、あるいは高名な教師、弁護士、そして医師は、いまもって非常にその数が少ない。彼らは失うものがあまりにも多すぎると信じているからだ。不幸にして、初期青年期にある同性愛の少年たちは、それゆえに、みずからの同性愛を自認するうえで助けとなるやもしれぬ役割モデルを奪われているのである。もしそのような役割モデルがいたとするならば、「ほくも、あの人のようにゲイなんだ。ほくも大きくなったら、あの人のようになりたい！」と、彼らは自分自身にむかって言うことができるかもしれないのだが。」(前掲書, p. 64)

たしかに、イサイの言うとおりにかもしれない。身近かに、もっと自分と同じ同性愛者として知られている有名人や社会的地位の高い人物がいれば、同性愛の人たちは、<異質である不安>をかきたてられることも、現在と比して少なくなるかもしれない。

## iii. <振り子の状態>と<実験的行動>

同性愛者の人たちのなかには、「いまは同性が好きだけれども、いずれは異性が好きになるはずだ」という思いから始まり、「やっぱり、同性が好きなのかもしれない」という思いを経て、再び「いやでも、もしかしたらそうじゃない(異性を好きになる)かもしれない」という思いに戻るといった往復する心理的な現象が認められる。

たとえば、石川さんは、次のように記述している。

「だから、自分の気持ち=男のコが好きなの

と、に素直になれなかった。「思春期よ早く終われ！」こう思ってボクの思春期は過ぎていった。「思春期が終われば、ボクは女のコに恋をするのだから……」(前掲書, pp. 80-81)

筆者の研究においては、Dさん・Gさん・Jさんに類似の現象がみられる。

●Dさん：

【中学生になると、自分は「同性」に興味を持つ特別な（異常な）存在なのではないか、という自覚が生まれ始めた。当初は、きっとこの段階を経て自然に異性愛にたどり着くのだから、もう少しの辛抱と置いていたのですが、中2の頃になんとか脱却して異性愛に早くたどりつかなくちゃ、と焦り始めていました。】

●Gさん：

【知識としてやはり思春期には女性を意識するようになるものと思っていた】

●Jさん：

【当初私は、まだ子供から大人への過渡期だから男性が対象でしたが、そのうち女性になるものとの思い込みがありました。】

イグナシオ・ロツァーノ-ヴェルドゥツコ (Ignacio Lozano-Verduzco) が、「同性愛の欲求を排除するのか、それとも社会化するのかのあいだを、振り子のようにゆれ動く。その動き方は、同性愛の男性たちが受容と排除のあいだを行ったり来たりするのと同じである」(Lozano-Verduzco, I., 2015, p. 27) と述べているように、同性愛者である自分を認めるのか、それとも拒むのかのあいだを往復する現象を、時計の振り子にたとえている。そして、この〈振り子の状態〉を解消するために、自分がはたしてほんとうに同性愛者なのかどうかを実際に試して確かめてみるという行動をとる人たちもなかには存在する。この行動は、Dさん・Eさん・Gさんにおいて認められる。

●Dさん：

【同性愛とは逆方面の自分を試すということで、高校生のころ、女子に告白してみたことがある。】

●Eさん：

【男性との初体験を済ませた時に、疑問がさらなる革新になった。<sup>3)</sup>】

【女性に対しての性的指向はない、性的指向は男性に向いているということです。】

●Gさん：

【女性の水着姿などを見ながらマスターベーションをしましたが、全く満足感が得られず、矯正は断念しました(苦笑)。】

Dさん・Eさん・Gさんにおける上記のような、ほんとうに同性愛者なのかどうか、みずからの性的指向を試してみるという確認の行動や、性的指向性をみずから変えようとする行動を、ここで〈実験的行動〉として定義したい。

iv. <正体が知れる不安>

さらに、ほとんどの男性の同性愛者の人たちは、良好な人間関係を構築し維持するためにも、自分が異性ではなく同性に性的な欲望を感じることは秘密にしておかねばならないという警戒心のようなものをもつとってよい。この警戒心のようなものを、ここでは〈正体が知れる不安〉とよぶことにする。さきほどの〈異質である不安〉と併せて、この〈正体が知れる不安〉をなんとか解消・除去しようとして、男性の同性愛者の人たちは四苦八苦するのである。殊に、Jさんの場合には、周囲からの否定的な言動や態度により、孤立無援の状態(社内のいじめ)におかれていたこともあり、〈正体が知れる不安〉ははかり知れない。また、Kさんの場合は、同性愛者であることを秘密にし続けることのたいへんさを物語っている。

●Dさん：

【まず、このことは絶対に外に漏れてはいけない、と固く思った。】

●Eさん：  
【男子が好きということは、他の人には言わない方がよいみたいだぞ。】

●Lさん：  
【気の合う同性の友達に性的要求ができてしまうので、友達関係を築けない、築いても自分からシャットアウトしてしまう。】

●Jさん：  
【会社で私と男性の新入社員とが先輩後輩として普通に親しくしていた時、勤めていたエリア内の会社員達ほぼ全員（約100人）に私達は“エイズ！”と差別的な表現で呼ばれました】

●Kさん：  
【職場の後輩を好きになり、親しくなったがGであることは隠していたのに、覺られてしまい、一方的につきあいを拒絶されてしまった】

【職場の後輩については、何度も交際を復活してほしい旨を告げ、Gではないと嘘をついて弁明したが、翻意はできなかった。】

●Nさん：  
【私はできうる限りノンケに見えるよう、言動や容姿にこだわり続けてきた。そういう面でのストレスはかなりあった。<sup>4)</sup>】

【私はGが集まるような場所やお店、サウナなどには一切近づかなかったので、余計そうであった。近づかなかった理由も、仕事関係など万が一ばれることを恐れてのことであり、やはりかなり抑圧された状況に長年いたと考えられる。】

ここで注意すべきは、この＜正体が知れる不安＞をもつことと、自分は同性愛者であると認めることとは次元を異にする現象であるということである。このことは、BさんやNさんに典型的にあらわれている。

●Bさん：  
【すぐに受け入れたが、友達にはそれを内緒にした】

●Nさん：  
【隠し続けてきている】

【自分は生まれついてそれなりの嗜好やフェチを持っており、自然とそういう自分を受け入れていたように思う。】

#### v. <男らしくない男の子症候群>

ところで、男性の同性愛者の人たちの一部には、子どものころ、「しぐさやふるまいが、男性なのに男らしくない、女っぽい」「男の子がふつうやるような遊びよりも、女の子がふつうやるような遊びが好きで、そればかりやっていた」「男の子たちとよりも、女の子たちとよく遊んでいた」といった人たちが存在することが知られている。

サイモン・ルベイ (Simon Levay) (1996) は、次のように記述している。

「こうして、幼児期のジェンダー不適応と成人後の同性愛の関係は、とくに男性については明確に確立された。—中略— この関係は発達心理学において最も際立った堅実な発見の一つとなっている。」(Levay, S. / 伏見憲明 (監修), 玉野真路・岡田太郎 (訳), 2002, p.93)。

アンナ・フロイトも、次のように記述している。「この時期〔潜在期のこと—筆者注〕で将来の同性愛傾向を暗示するものは、むしろ女の子と遊びたがったり、女の子の玩具で遊んだり、こっそり楽しんだりといった傾向の方である。こういった逆の傾向は、潜在期の少女にもあてはまる。」(前掲書, p.160)。

ここでは、<男らしくない男の子症候群>とよんで、検討してみたい。たとえば、バーナード・ズッカー (Bernard Zuger) (1984) による研究では、早期より女の子のようなふるまいをする被験者の少年たち55人を追跡調査した結果、38人の少年たちの性的指向性に関して決定することができ、35人 (63.6%) が同性愛者かその変異型になり、3人 (5.5%) は異性愛者になったと報告されている。ただし、残った17人の少年たちのうち、10人はその性的指向

性を確定することができず、7人はその後の追跡調査をすることができなかったという。

本研究では、Fさん・Gさん・Iさん・Kさん・Lさんがその典型的な例であろう。

●Fさん：

【しぐさとか言葉遣いが女性っぽく見られないか気になった。】

【ある友人に「…じゃないの」ってよくいうけど、なんか女っぽいと言われたことがあった。】

●Gさん：

【小さい頃から少し女性っぽいところがあったため、よく「オカマ」と言われていじめられました。】

【言葉づかいがかなり優しい感じでした。歩き方も小股でチョコチョコ歩く感じでした。少しだけピアノを習っていたのですが、一緒に習っていたお姉さんたちが小指を立ててピアノを弾いているのを見てそれを真似してみたり（笑）。小学生の時はゴム飛びもよくやりました。逆に男の子がよくやる球技（野球、ドッチボール、キャッチボール）などは大変苦手でやりませんでした。そういう様子を周りの男子たちが見て、「女のようだ」「きもい」「オカマ」と言うようになりました。女子たちからも「クラスのどの女子よりもおしとやか」とか言われたりしました。】

●Iさん：

【同性愛者としてとはちょっと違いますが、私のキャラクターがキャピキャピしていて、歩くカミング・アウトのようなもので、小中高（大）と、知らない人にも「あの人ホントにオカマらしいよ」→「まじで！？ チョウウケる。キモイ。」という話が多々あること。】

【精神的ダメージが大きくて泣きっぱなしなしてました。】

●Kさん：

【自分の中身が純粋に女の子である】

●Lさん：

【きっと本当は、ままごとをやって、きせかえ人形をやって、絵をかくて、そういうことをたくさんしたかったのに、同年代の友人は、ゲームセンターいって、スポーツやって、暴力的で、そういう人間関係の中にいることが苦痛だった。】

Fさんの場合は、言動が「女っぽくて男らしくない」と友人から指摘を受けたことにより、「自分が同性愛者であることが周囲に知られてしまうのではないか」、あるいは「すでに知られてしまったのではないか」と、「正体が知れる不安」に陥った。Iさんの場合は、【私のキャラクターがキャピキャピして】いるところが、周囲の人たちの目には、「男の子なのに、なんだか女の子っぽい」という印象として映り、【あの人ホントにオカマらしいよ】と判定され、いじめられたものと考えられる。そしてこのことは、Iさんにとって一つの心的外傷体験となってしまう。

次に、Kさんの場合である。【自分の中身が純粋に女の子である】と書いているのだが、このことに関連して、フロイトは、次のように記述している。

「心的な両性具有に関する理論では、対象倒錯者の性対象が正常な性対象と相反するものであることは当然の前提となっている。すなわち、男の対象倒錯者は、女性と同じように、男の肉体的特徴や心の特徴から発する魅力に弱く、自分自身を女であると感じ、男を求めるというのである。これが妥当する対象倒錯者はたくさんいるが、対象倒錯の一般的特徴を言い当てているわけでは全然ない。男の対象倒錯者の大多数は、男としての心的特徴が保たれており、反対の性の第二次的性別特徴を備えていることは比較的まれである。」（前掲書、p.182-184）

たいていの男性の同性愛者の人たちは、フロイトも「男の対象倒錯者の大多数は、男としての心的特徴が保たれており」と述べているよう

に、「自分自身を女であると感じ」てはいないであろう。だが、Kさんに限っていうならば、「自分自身を女であると感じ」ていることがわかる。Kさんのように、同性愛者の人たちのなかには、女性的な心性をもつ人もいることがわかる。

このように、男性の同性愛者の人たちにとって、この「男っぽくない・男らしくない (effeminate・camp・sissy)」ところが、そのまま「同性愛者 (オカマ) である」と判別されることの悲しみや、自分が同性愛者であることが顕現してしまうのではないかという恐怖といっても過言ではないほどの不安を感じるのではないかと推測される。Dさんが【「同性愛・おかま」というのは社会規範からはずれた、嘲笑されるべき存在で、全うな人間ならばそうはならないものだという暗黙のルールを感じ取っていた】と書いているように、男性の同性愛者の人たちにとって、周囲の人たちから「オカマ」と呼ばれることは、侮辱である。そして、これも＜正体が知れる不安＞のひとつである。

#### vi. 「異性愛者的役割葛藤」の不自由さに耐えること

日高は、男性の同性愛者の人たちがかかえる「異性愛者的役割葛藤」について、次のように説明している。

「カミングアウトしていない多くのゲイ・バイセクシュアル男性は日常的に異性愛者としての役割期待に応えるために努力しているといえる。」(日高庸晴, 2000, p. 268)

「「異性愛者」としての社会的役割とは、女性と恋愛関係にあることが自明視される中、日常の会話が進められることであったり、親から結婚や孫を期待されることによりプレッシャーを感じつつも「異性愛者」として立ち振る舞うことであったり、男性の恋人やゲイ・バイセクシュアルの交友関係のことを自由に話せない制約などである。こうした異性愛者を装う役割演技によってゲイ・バイセクシュアル男性の多くはストレスを抱え、自らの性的指向やその欲求を抑圧しなければなら

ない。」(前掲書, pp. 269-270)

日高の述べるように、ほとんどの男性の同性愛者の人たちは、＜正体が知れる不安＞をなんとか軽減しようとして、四苦八苦する。＜正体が知れる不安＞から、ほんとうはそうしたくはないのに、異性愛者中心主義の社会では異性愛者のふりをせねばならず、そこから「異性愛者的役割葛藤」が生ずるのである。この＜正体が知れる不安＞を軽減させるには、「異性愛者的役割葛藤」の不自由さに耐えねばならず、そこに生きづらさを感じることになる。

筆者の研究においても、多くの人たちが「異性愛者的役割葛藤」の不自由さに耐えていることがわかる。

#### ●Aさん：

【この歳で結婚しない事をやはり諸々言われたり、肩身の狭い思いをしております。】

#### ●Bさん：

【大学時代、サークルの合宿の夜中の飲み会で、好きな子は誰が一人ずつ言わなければいけなかったとき、無理矢理、一般的に可愛い、皆から人気があった女の子の名前を言いました。】

【異性の話や恋愛の話になった時は面倒臭いなと思っていて、出来ればそういう場面から避けたいとは思っていました】

#### ●Eさん：

【彼女の存在や結婚のことを聞かれたときに、彼氏の存在を彼女と言い換えたり、嘘をついたりする自分に嫌気がさしたことがあった。】

このように、どのあたりまでを「異性愛者的役割葛藤」と感じるかは、その人によって異なってはくるものの、ほとんどの男性の同性愛者の人たちが、なんらかの「異性愛者的役割葛藤」を体験しているといつてよい。<sup>5)</sup> 自分が異性ではなく同性に性的な欲望を感じることは秘密にしておかねばならないという＜正体が知れる不安＞ゆえにである。

## vii. 「オモテ」と「ウラ」

ところで、Lさんが次のように書いていることは、注目に値する。

## ●Lさん：

【2つの仮面を着け外ししながら生きている、全く違う2つの世界を2つの人格をもっていきさしている】

【2つの仮面】や【2つの世界】というLさんの表現は、石丸の行った研究に出てくる「あっちの世界」と「こっちの世界」という表現に通ずる。石丸は「あっちの世界」と「こっちの世界」について、次のように記述している。

「LGBにとって“あっちの世界”であると感じられるのは、異性愛者が構成員の多くの割合を占める生活世界のことである。LGBの存在は、人口中の割合としては異性愛者よりもかなり少ない。意図的にLGB同士で集まらない限りは、LGBは多くの異性愛者たちの中で少数者として過ごすことになる。具体的には、職場・学校・家庭など、LGBの日常生活の多くが“あっちの世界”として感じられる。一中略—つまり“あっちの世界”というのは異性愛が暗黙の前提となっている世界である。一中略—“あっちの世界”においてもっともよく見られる経験は“異性愛者を装う”ことである。」(石丸, 2008a, pp. 69-70)

「“こっちの世界”と感じられる場面では、LGB同士のやり取りがなされる。異性愛であることが前提となっていた“あっちの世界”とは逆に、お互いにLGBであることが前提とされたコミュニケーションがおこなわれる。典型的な場面としては、LGBである友人と会う経験、LGBサークルでの活動の中での経験や、新宿二丁目などのゲイタウンでの経験などが見られた。」(前掲書, p.76)

Lさんのいう【2つの世界】とは、石丸のいう「あっちの世界」と「こっちの世界」を意味していることは一目瞭然であり、【2つの仮面】とは、言わずもがな、「あっちの世界」でつけ

る仮面と「こっちの世界」でつける仮面のことである。石丸(前掲書, p. 80)は、「こっちの世界」について、「“あっちの世界”では言えないようなことや表現できなかった感情を、存分に表現して共有する時には、強い連帯感を生み出しやすいのだろう」と記述しているが、DさんやNさんも同様のことを書いている。

## ●Dさん：

【この問題を共有することのできる仲間をたくさん作れたおかげで、孤独ではないと実感できる】

## ●Nさん：

【私が〇〇に入団した時、周囲がすべてGであり、何の気兼ねもなく皆当然のようにGとしての会話をしている中に入り、非常に救われた記憶がある。その頃まで私はGが集まるような場所やお店、サウナなどには一切近づかなかったので、余計そうであった。】

同性愛者の人たちが行う「あっちの世界」でつける仮面と「こっちの世界」でつける仮面のつけかえで類推されるのが、土居健郎の「オモテ」と「ウラ」論である。石丸の「あっちの世界」が土居の「オモテ」の世界であり、「こっちの世界」が「ウラ」の世界となろう。土居は述べる。

「日本人は日常絶えずこのオモテとウラの二本立てで社会生活を営んでいる。何がオモテになり、何がウラになるかは、場合々々によって変るし、時によってオモテがウラになり、ウラがオモテになることもあるが、しかしオモテとウラの区別をつけることだけは変わらない。」(土居健郎, 1976, p. 2)

同性愛者の人たちにとっては、「オモテとウラの二本立てで社会生活を営んでいる」ことは、まさしく日常茶飯事なのである。

さらに、「オモテ」は「あっちの世界」、すなわち異性愛者の世界であるため、同性愛者の人たちは<正体が知れる不安>にさらされること

になる。「ウラ」は「こっちの世界」、すなわち同性愛者の世界になるのだが、＜異質である不安＞を解消するということは、「ウラ」の世界、すなわち同性愛者の世界の住人になることでもあり、【2つの世界】を生きることになる。そして、以下で論ずるように、カミング・アウトをする範囲を拡大していくことは、同性愛者の人たちにとって、【2つの世界】、すなわち「あっちの世界」と「こっちの世界」、もしくは「オモテ」の世界と「ウラ」の世界を1つの世界に統一していくことになるのであろう。

### 3. 性的指向性の受容と性的アイデンティティの確立にむけて

Vの2において、＜異質の不安＞や＜正体が知れる不安＞と、それに付随する＜振り子の状態＞や＜実験的行動＞、および＜男らしくない男の症候群＞についてその詳細を述べ、「異性愛者的役割葛藤」をかかえることの心労や辛労にふれることで、同性愛者の人たちのかかえる困難や混乱、困惑、葛藤、そして生きづらさなどについて詳説してきた。

これから、同性愛者の人たちが、このような困難や混乱、困惑、葛藤、そして生きづらさなどにどうやって対処し、解決し、克服していくのかその過程を解説し、そして、そこに、性的指向性を受容するにあたり、段階が存在するということをあきらかにしていきたい。

#### i. 性的指向性の＜仮の受容＞の段階

Vの1において、同性に対して性的な魅力や興奮を感じるようになる段階を＜性への目覚め＞の段階としたが、ここで、＜性への目覚め＞の次の段階を考えてみたい。

異性愛が当然とされる異性愛中心主義の社会において、自分が同性に性的な興奮を感じるということは、社会の主流からはずれることになるし、異性愛中心主義の社会を生きていくためには、そのことを秘密にしておかねばならない。すると、＜異質である不安＞しろ＜正体が知れる不安＞しろ、このような状況に追いこま

れるのは、その人が、「自分の性的指向性は異性ではなく同性に向いているのだ」と、ひとまず「自覚」しているからこそではないだろうか。

このように、自分の性的指向性が同性に向いているということ、ひとまず「自覚」する状況へと追い込まれる段階を、性的指向性の＜仮の受容＞の段階とする。この＜仮の受容＞の段階をひとまず踏んだことにより、その人は、＜異質である不安＞や＜正体が知れる不安＞におそわれるのだらうし、「異性愛者的役割葛藤」を演じなければならないことになるのだらう。

イサイは、次のように記述している。

「計画されていない、予期しないできごとに対処しなければならない必要性がでてきたときに、潜在的な対処能力があらわれてくることは、よく起こることである。このことはいつも、同性愛者である青年たちが自己認識するとき起こる。彼らは、偏見をもった社会のなかで、みずからのセクシュアリティを表現する方法を見つけ出さねばならないし、異性愛者である仲間たちとうまくやっていく方法を見つけ出さねばならない。彼らは、仲間たちばかりでなく、血のつながった家族と自分ががちがっていることについて考え始める。自分の将来や、なすべき選択についてのさまざまな疑問が、彼らの頭の中に浮かんでくる。そこには、平凡な生活を送って、自分自身の家族をもって、というかつて描いていた未来図を棄て去らなければならない可能性も含まれている。」（前掲書、pp. 82-83）

イサイの述べるように、同性愛者の人たちが、自分の性的指向性は異性ではなく同性に向いていると「自覚」したときには、すなわち、性的指向性の＜仮の受容＞の段階に進んだあかつきには、未来において異性愛者として生きる道は絶たれるのかもしれないという、かすかな予感をいだくのかもしれない。そしてそれは、将来的には、「同性愛者の星の下に生まれてしまったのだから、しかたがないというあきらめの気持ち」にもつながるのかもしれない。

## ii. 性的指向性の〈真の受容〉に向けて

今、性的指向性的受容には、〈仮の受容〉の段階があったが、〈仮の受容〉が存在するという事は、論理的に考えるならば、〈真の受容〉の段階も存在するという事になる。そこで次に、この〈真の受容〉に向けて、同性愛者の人たちが、一般的にどのような過程をふんでいくのかを考えてみたい。

## (1) 〈否定的自己感〉から〈肯定的自己感〉へ

同性愛の人たちは、異性愛が当然とされる異性愛中心主義の社会を生きていくうえで、生きづらさを感じ、Dさん・Fさん・Jさん・Lさん・Mさんのように、同性愛者である自分がいやになり、自己嫌悪感をいだく人もいる。この自己嫌悪感のことを、本稿では、〈否定的自己感〉とよぶことにし、その対義語に、〈肯定的自己感〉をあてることにする。

## ●Dさん：

【いやになったことはある。高校時代は、その抑うつ時のピークの時期だったと思う。自分で自分の性を一番嫌っていたころだったと思う】

## ●Fさん：

【若いころには何度もあった。】  
【打ち明けられないし、男同士の会話に参加できないとき。】

## ●Jさん：

【自分の指向性を社会から認められていない、排除されているもの、差別の対象と感じていたのでいやでした。】

## ●Lさん：

【むかしは嫌で消えてしまいたいと思ってた。】

## ●Mさん：

【同性愛者である自分を嫌だと思えることはありました。】

【自分自身のためと言うよりは、「親を安心させてあげたい」「孫をみせてあげた方がいいのでは」という考えから来ていました】

このように、たいていの同性愛者の人たちは、「自分は変じゃないか」「自分は他人とはちがっている」という〈異質である不安〉によって、あるいは、Mさんのように、「孫の顔を見せてあげられない」ことからくる親に対する罪悪感によって、みずからの存在価値がゆらぎ、その結果、〈否定的自己感〉をいだくのである。だが、そのうち、このような閉塞した状態からなんとかして抜け出したいと望むようになる。そして、この混乱の状態から解放されるための行動をおこすことになる。

トロイデンは、「いったん同性愛アイデンティティを採用した、レズビアンやゲイの女性たちやゲイの男性たちは、同性愛という烙印の問題とその取扱い・処理の問題に直面する。アイデンティティの引き受けの段階にいるあいだは、いくつもある烙印回避の戦略のうちの1つを採用するだろう」(Troiden, R. R., 1989, p. 41)と述べており、その戦略の例として、〈降伏(Capitulation)〉と〈劇化(Minstrelization)〉、〈パッシング(Passing)〉、および〈連帯(Group Alignment)〉の4つをあげている。<sup>6)7)8)</sup>このうち、〈パッシング〉の戦略がもっともよく採用され、〈連帯〉も同性愛の初心者にはよく採用される戦略だと指摘している。また、トロイデンは、「〈連帯〉は、同性愛の初心者によってよく採用される。所属をとおして烙印から逃れようとする同性愛の男性たちや女性たちは、同性愛のコミュニティーに積極的に参加するようになる。似たような境遇にある他の人たちの世界に“所属している”と認識することは、烙印の苦痛を和らげてくれるのだ」(前掲書, p. 62)とも述べている。

ロツァーノ-ヴェルドツツコも、「同性愛の欲求を社会化することは、同性愛者の男性たちが孤独や悲哀、そして罪悪の感情を消散させるための1つの方法であり、彼らが社会のなかで自分自身であると名をのめることのできるコミュニティや象徴的な空間を捜し求めるための1つの方法なのである」(前掲書, p. 28)と、同様のことを述べている。

筆者の研究においても、前に述べたように、〈バッシング〉の戦略は、ほとんどの同性愛者の人たちが採用していたし、〈連帯〉の戦略の採用も、Aさん・Bさん・Iさん・Lさん・Mさんのように、多くの人たちに認められる。

- Aさん：  
【コミュニティーも会社以外はほぼ同性愛関係である】
- Bさん：  
【最初は、インターネットでこちらの世界のことを知り、同性愛者が普通に世の中には沢山いるんだと知ったので、入りやすかった気がします。】
- Iさん：  
【中学時代にビアンの友達が生居て、その子がやりたいことをやりたい通りにやっていたので、「あ、自分もこれでいいんだ!」とおもった】
- Lさん：  
【同じ仲間を探して苦しさを共有する、気兼ねない関係を探す。】  
【一番の関心は、誰か気持ちを共有できる人はいないか?というこゝで、いわゆる出会い系の写真付きネット掲示板をみて、同年代で気があいそうな人と会うことを始めました。】
- Mさん：  
【ずっと同性愛者として過ごしてきて、同じ同性愛者の友だちも出来たし、いいこともたくさんあった】

このように、同性愛者の人たちにとって、自分と同じ境遇の人が他にもいるということや、同じ仲間がいるということが、心の支えとなる。換言すれば、同じ性的指向性をもつ人間が、自分以外にも実在していることを知ることゝ、同性愛者は稀有な存在ではないことがわかり、そのことが、性的指向性を受容するにあたり、ハードルを低くしてくれるのだといえよう。そして、それは、〈否定的自己感〉から

〈肯定的自己感〉へと変化するきっかけの1つとなる。ただし、〈降伏〉や〈劇化〉の戦略を採用した人は、今回の筆者の研究においては1人もいなかった。

ところで、なかには、Eさん・Gさん・Iさん・Kさん・Nさんのように、同性愛者である自分がいやにならなかった、すなわち、さほど〈否定的自己感〉をいだかなかった人たちも存在する。

- Eさん：  
【ほとんどない。】
- Gさん：  
【同性愛者であるからという理由で自分のことをいやになったことは、ありません。】
- Iさん：  
【NO】
- Kさん：  
【ない。】
- Nさん：  
【ない。】

その理由として、Eさん・Gさん・Iさん・Kさん・Nさんが書いていることとしては、以下のとおりである。

- Eさん：  
【日常生活で大きな困り感がなかったのと、それなりに周囲と調和しながら楽しく生活してきたから。】  
【自分がゲイであるかどうかの前に、一社会人として仕事を頑張った。仕事で認められたかった。】  
【社会人として仕事をしているうちに、ありのままの自分でよいと思った。親、兄弟、同僚、友達とのかかわりの中で、ゲイである自分を受け入れた方が、人生が豊かで楽しくなると思ったから。】
- Gさん：  
【実家がお寺で仏教的な考え方が身につけていたせいでしょうか、この世に生まれて

きた以上は何か役割があるはずと思ったからです。何か意味があってゲイとしてこの世に生を受けたのだらうと思ったので自分のことをいやにはなりませんでした。】

【『仏説阿弥陀経』というお経の中に出てくる一節「青色青光，黄色黄光，赤色赤光，白色白光」という言葉があります。これは極楽の池に生えている蓮のことを描写している言葉ですが，青い蓮は青い光，黄色い蓮は黄色い光，赤い蓮は赤い光，白い蓮は白い光を放っている，それぞれが自分の色で咲き，自分色で光っている，という意味なのです。この言葉の意味を知った時，ああ，自分は自分色で光っていいんだと思えるようになったのだと思います。】

●Iさん：

【ピアンの子がいたのであたし一人が変なわけじゃない】

●Kさん：

【自分は自分だと思っから。】

●Nさん：

【仕方ない思っていた。】

【あるがままの自分を受け入れるしかないのではないか。】

【そうである自分がいた。】

【そうなのだから仕方ない。それが自分である。】

EさんやIさんは，物事や事態を肯定的に捉えようとする＜前向き思考＞によって，＜異質である不安＞をはじめとする閉塞状態を打開し，性的指向性の受容にともなう苦悩や葛藤を解決したともいえる。Gさんは，仏教の教えによって，Nさんは，【そうである自分がいた。】【そうなのだから仕方ない。それが自分である。】というふうに，実存主義的な思考方法によって解決したといえる。そこで，GさんやNさんのような思考方法を，ここでは＜哲学的な・スピリチュアルな思考＞と定める。他にも，＜前向き思考＞によって解決しようとした人には，AさんとBさんがおり，＜哲学的な・スピ

リチュアルな思考＞によって解決しようとした人には，Dさんがいる。

●Aさん：

【ネガティブよりはポジティブに受け入れていきましたね。】

●Bさん：

【有りのままの自分を受け入れ，そういう自分と共存しながら，幸せに生きて行きたいと考えたから。】

●Dさん：

【人間みなそれぞれその人の悩みを抱えて生きていくものであって，それが何であれ，恨むものでもなければ，僻むものでもない，という一種の宗教的な境地が見えてきた】

【よくこんなに深く人生を見つめる課題をいただけたものだとして感謝に似た感慨も湧いてくる。】

ところで，①＜前向き思考＞，②＜哲学的な・スピリチュアルな思考＞，という2つの方法以外に，もう一つ別の方法があるように思われる。それは，③＜周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用＞である。この③が，Eさん・Fさん・Iさんのように，混乱を解決するにあたり促進的に作用することがある。

●Eさん：

【相手が非常に肯定的にカミング・アウトを受け入れてくれて，それが大きな自信になったから。】

●Fさん：

【ゲイの色々な素晴らしい人や生き方を知ったこと。】

【素晴らしい友人やパートナーに出会えたから。】

【パートナーと一緒に所属するテニスクラブでは夫婦以上に一緒に行動しているので，殆どの方々が我々がゲイであることを感じていると想像しますが至って好意的です。】

●Iさん：

【〇〇はそのままイイよ】とも友達に言われたのもあるかもしれないです。】

この③の〈周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用〉は、さきほどの〈連帯〉とはやや似ているが、本質的に異なるものである。〈連帯〉は、自分と似たような境遇にいる他の同性愛者の人たちとの出会いを求めるのに対し、③の〈周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用〉のほうは、周囲の人たちは、そのほとんどが異性愛者の人たちであるという環境にあつての友好的な・寛容的な待遇である。<sup>9)</sup>

こうして、男性の同性愛者の人たちの心のなかで支配的だった〈否定的自己感〉は、〈肯定的自己感〉へと、時間をかけながらゆっくり変化していくのである。

(2) 性的指向性の〈真の受容〉の段階

ここで、注目に値するのが、さきほどのBさん・Eさん・Gさん・Nさんにみられる【有りのままの自分】【自分は自分色で光っていいんだ】【あるがままの自分】という表現である。これと類似した表現は、他の研究協力者の人たちにもみられる。

●Aさん：

【同性愛者の自分が本当の自分であると思っている】

【それが自然だと考えている】

●Iさん：

【自分は自分なんだからとひらきなおり】

●Lさん：

【このままの自分でもいいんだって思えた】

【本来、人間はあるがままの自分でありたいとおもうものではないでしょうか。】

このような、「ありのままの自分」「あるがままの自分」「本当の自分」「自然な自分」といった表現を、ここでは〈素(す)の自分〉とよぶことにする。

さらに、これらの表現の背景には、Nさんが、【仕方ないと思っていた。】【あるがままの自分を受け入れるしかないのではないか。】と書いているように、「同性愛者の星の下に生まれてしまったのだから、しかたがない・どうしようもないというあきらめの気持ち」や「同性愛者として誕生してしまったのだから、それを運命として受け入れなければならないのだというあきらめの境地」といった心情があるようだ。同性愛者の人たちのほとんどが、「しかたがない」「どうしようもない」という「あきらめの気持ち」を抱くにちがいない。この「あきらめ気持ち」や「あきらめの境地」を〈諦念(ていねん)〉「物事の道理を悟って諦める心をさし、主として文章に用いられる硬い漢語」(中村 明, 2010)として定義する。

また、〈諦念〉には、FさんやLさんのように、「しよせん、人生とは孤独なものである」「人間は独りぼっちなのだ」と感じて、自分自身に納得させる態度となってあらわれる場合もある。

●Fさん：

【ごく普通に結婚して家庭をもっている友人達が決して幸せには見えなく、結局人生は一人なのだと感じた】

●Lさん：

【人は所詮孤独な存在なんだと言いつける。】

〈素(す)の自分〉だけは、変えたくとも変えようがないという〈諦念〉が存在するのである。このことは、Aさん・Eさん・Iさん・Jさんの次のような表現からも読み取ることができる。

●Aさん：

【正直、「だってしょうがないじゃない」と思ってますから。(笑)】

●Eさん：

【受け入れようと思って受け入れたわけではなく、受け入れざるを得ないと思った】

●Iさん：

【自分は自分なんだから、変えることができないから。変えようと思って変えられるものでも無いし。と思っているので。】

●Jさん：

【積極的に受け入れようと言う意識はありませんでした。始めから仕方ない事と言う意識だったと思います。しかし受け入れたいとする無意識はあったように思います。】

そして、みずからの性的指向性の〈真の受容〉の段階とは、〈素（す）の自分〉でいいのだと思えるようになることなのである。このとき、「自分は同性愛者である」という性的アイデンティティが確立されたといえよう。<sup>10)</sup>

このように、〈否定的自己感〉から、自分はこのままの自分でよいのだという〈肯定的自己感〉への変化が基盤となり、〈素（す）の自分〉だけの変えようがないではないかという〈諦念〉を土台にして、〈素（す）の自分〉でいいのだと思えるようになることが、性的指向性の〈真の受容〉ということになる。

### (3) 同性愛と医療機関・カウンセリング

ルベイによると、「同性愛に取り組んでいたアメリカの精神分析医たちはまったく中立ではなかった」という。

「四〇年代、五〇年代のアメリカでは同性愛の社会的受容はどん底に達していた。ゲイ男性自身も、その家族も、社会も強く同性愛を排除したいと考えていた。したがって、精神科医がゲイ男性の性的指向を変えようとするのには、強い動機があったのである。」（前掲書、p. 73）

マーチン・デュバーマン（Martin Duberman）という歴史家・教育者は、1950年代から60年代にかけて、東海岸の3人の精神分析医（Weintraub医師とIgen医師、およびKarl医師）を渡り歩いた経験を語っている。

「Weintraub医師は、最初から、Larryとの関係を断つように私に忠告した。彼が警告するには、私がそうしないのであれば、セラピー

においてほんとうの進歩とよべるものは、すべて不可能になるであろうとのことだった。」（Duberman, M., 2002, p. 33）

「Igen医師は、ほんとうの不道徳行為というのは、私の同性愛についての真実をうっかり口走ってしまうことだということを、私に確かめさせた。—中略—「結局、同性愛は君にとっていずれ過去のものになると思うよ。いつまでもそれにこだわっていると可能性のある将来を棒に振ることになるからね。」30歳を超えた私には、そのような希望的観測は、ますます空想的に思えた。だが、私は彼のことを信じたかったのだ。」（前掲書、p. 59）

「私は2年近くもセラピーに通い続けた。Karl医師は、私にそのことを思い出させた。これまで彼は、私の性的指向の問題をわざと成り行きにまかせてきたのだった。しかし、Karl医師は、彼が集団療法のときにしゃべったことを本気で言っていたのだ。これから同性愛についての話題は禁止とする。もし、私がいまだに「行動化」しなければならない必要があるのならば、彼には私を止めることなどできない。しかし、彼は、集団療法のときに、私が自分の同性愛行動について話すことによって、第二の興奮を得ることがないように防ぐことはできる。もし、私がこの新しい合意が気に入らなければ、私は自由にセラピーをやめることができる。選択権はこの私にあるのだ。Karl医師は、このことを明確にしたのだった。」（前掲書、p. 122）

以上のことから、当時のアメリカにおいては、同性愛は忌むべきものであり、治療して排除しなければならないものであったが、その治療には、困難を極めたことがわかる。同様のことは、わが国日本にもあてはまる。たとえば、及川卓は、男性同性愛者の大学生A君に対して、約4年間、精神分析的心理療法を試み、現在も継続中（当時）の症例を報告している（及川、1982）。4年簡におよぶ心理療法をとおして、「A君の神経症症状は、ほとんど消失したとっていい」のだが、「同性愛傾向そのものが

消失、異性愛へと変化したというわけではない』と、彼は記述している。そして、A君の治療をふり返って、及川は、次のように述懐している。

「同性愛を性的倒錯とみなす精神分析的立場に立つにせよ、こうした態度を強力に過度に主張することは、同性愛者の人格、あるいはそれまでに作りあげられた同性愛者アイデンティティーを完全に拒否してしまうことになる。不必要に患者を同性愛者であることにこだわらせ、面接を不毛な論争の場と化してしまうことになる。これは多かれ少なかれ同性愛者を治療する際に直面しなければならない問題である。—中略— 科学的・中立的態度を保持することが望ましいように考える。」(前掲書, p. 148)

ここまでの彼の記述から、この書籍が出版された1980年代前半において、同性愛は治療すべきもの、治療することができるものという考えが心理療法家のなかにあったのだろうと推測できる。これが、当時の精神分析理論や心理療法論の限界であったのだろう。だが、筆者は、及川のいう「科学的・中立的態度を保持すること」よりも、同性愛者であることからくる患者の苦しみや悩み、混乱や葛藤、そして孤独感など、異性愛者中心主義の社会での生きづらさに共感し、患者が同性愛者である自分とどう向きあい、どう生きていくのかを話し合っていくのが正しい方向性のように思われる。Eさん・Fさん・Lさんが書いているように、同性愛者の人たちが、同性愛者ならではの人生の意味を発見していくのを援助することこそが、カウンセリングや心理療法の果たす役割なのではないだろうか。

●Eさん：

【人生の豊かさや楽しさは、性別で決まらなと思った】

【どんな境遇で生まれても、自らの人生は自らで開拓していくしかない】

●Fさん：

【セクシュアリティがどうであれ、全ては

その人の人間性が左右し、それこそが大切だと信じます。】

●Lさん：

【どんな相手でも、大事な事に嘘をつくのは人間関係を築く上で失礼だなんておもうようになりました。】

1973年に、アメリカ精神医学会は、『DSM-III』から、同性愛を疾患からはずした。それにもかかわらず、同性愛者に対する差別や偏見は今日まで残っている。今回の筆者の研究において、そのことを如実に書いているのがJさんである。Jさんは実際にカウンセリングに出かけていくのだが、自分が同性愛者であることが告げられずに帰ってきてしまう。ただし、Jさんは、同性愛者であるという自分の性的指向性を治してもらおうとしてカウンセリングに行こうと考えたわけではなく、【世間と同質化せずに、このまま傷をつけられ続けたくないと強く感じたため】である。Jさんと同様に、DさんやLさんも実際にカウンセリングを受けに行ったのだが、Jさんと同様に、2人とも同性愛者であるという自分の性的指向性を治してもらおうとしてではない。

●Dさん：

【大学に入ってすぐに、性の問題で大学付属の相談所にカウンセリングを受けに行ったことがある。】

【カウンセラーが矯正、矯正という方向に話を持っていかうとする意図が見えてきた時点で、「この人に相談してもこの人の望む生き方しか示してくれないだろう」と感じて、やめた。】

●Gさん：

【僕は「これではいけない」と思いつつも、「これは病気だ」と思ったことはなかった。治療という観点はありませんでした。】

●Iさん：

【性別：〇〇と言う事が確立されていることと、男性を好きになることに違和感がな

かったため。】

●Jさん：

【私には、他者との関わり合いの中でのチグハグがありました。いわゆる“世間”と言うものに、Gに対する蔑視・差別があったことが“いやで仕方なかった”原因です。】  
【こころの問題を解決してくれるとの宣伝をしている所へ行ったことがあります。しかし、勇気が足りなかったため、本当の事が言えずに帰ってきました。結果、どうもなりませんでした。】

●Lさん：

【同性愛自体を治療しようとおもってということはありませんが、大学生のときに、人間関係の築けなさ、いつも孤独な気分、大学のカウンセリングに1度いったことがある。】

今回の研究協力者の人たちは、Dさん・Gさん・Iさん・Jさん・Lさんのように、同性愛者である自分を病気であるとは思っていない。このあたりは、1940年代から60年代のアメリカにおける同性愛に関する思潮や、及川の症例とは様相を異にする。

むしろ、FさんやNさんのように、これがほんとうの自分、すなわち＜素（す）の自分＞なのだから、治すまでもないという気持ちがあるようだ。

●Fさん：

【自由な生き方を生きる道を選んだから。】

●Nさん：

【自分は生まれついてそれなりの嗜好やフェチを持っており、自然とそういう自分を受け入れていたように思う。従って極端に自己嫌悪することもなければ医療機関などという考えすら思いつかなかった。そうなんだから仕方ないと思っていた。】

iii. <正体が知れる不安>から解放されること  
性的指向性の＜真の受容＞の段階をへて、

<異質である不安>が解消されたとしても、同性愛者の人たちは、異性愛が当然とされる異性愛中心主義の社会を生きていくうえで、みずからの性的指向性を周囲の人たちには秘密にして、隠しておかねばならず、そのためには、異性愛者を装わなければならない。そこには、「自分が同性愛者だとばれたらどうしよう」「これまできずいてきた人間関係が崩れてしまうかもしれない」などといった恐怖心が常につきまとい、そして、「自分が同性愛者であることを知られないようにしなければ」という＜正体が知れる不安>にかられてしまう。しかし、いつまでもハラハラ・ドキドキしているわけにもいかず、なんとか打開策を講じねばならなくなる。

これから、同性愛者の人たちが、この＜正体が知れる不安>をどのようにして取り除いていくのかを述べていく。

(1) カミング・アウトをすること

このような状況を打開するためには、Dさん・Eさん・Gさん・Mさんのように、周囲の人たちにみずからの性的指向性を打ち明けるしかないだろう。すなわち、カミング・アウトをするしか、他に選択肢はないだろう。

●Dさん：

【生まれて初めて、親身になっていろいろなことを話してくれる大学の先輩にカミング・アウトしたこと。当時は、情報のまったくない時代で、独りで判断する結果の見えない非常に勇気のいる行動だったが、とてもいい人だったので、私の心情を受け止めてもらうことができた。】

●Eさん：

【周囲に対してカミング・アウトをすること、自分のありのままを受け入れることで解決した。】

●Gさん：

【実家がお寺で、将来僧侶になってお寺を継ぐことを期待されていたので、僧侶にならない、お寺も継がない、東京に出たい、

ということを打ち明ける時に、どうしても自分がゲイであることを言わなければ説得できないと思ったからです。】

●Mさん：

【家族とその身近な人たちにはカミング・アウトしています。会社ではしていません。】

ところが、カミング・アウトをすることは、同性愛者の人たちにとって、一筋縄では行かない問題なのである。

たとえば、2015年の夏に、一橋大学のロースクールに通っていたAくんが苦悩の末、校舎6階から落ちて亡くなるという悲劇がおこった。最高に信頼していて、カミング・アウトをし、そして好きだと告げた同級生Zくん「あいつはゲイだ」とLINEで言いふらされたことが原因だった。<sup>11)</sup>

ジョゼリト・エレニョ (Joselito R. Ereño) は、次のように述べている。

「また、同性愛の青年たちは、ジェンダーの指向性にもとづいて自分たちのことを判断することはないだろうと思われる人々にみずからの性的指向性を打ち明ける。この理由から、同性愛の青年たちのなかには、学校ではカミング・アウトしたほうがよいと思うのである。この研究でわかったこととして、このような同性愛の青年たちは、学校において、強い「仲間に対する愛着」をもっていると感じている。それは、友人らにみずからの性的指向性を打ち明けることで安らぎをえるからである。」(Ereño, J. R., 2014, p. 116)

Aくんも、学校においてもっとも信頼することのできる好きなZくん「みずからの性的指向性を打ち明けたのである。ところが、その気持ちをZくんによって無惨にも踏みにじられてしまったのだった。」

筆者の研究においても、研究協力者のほとんど人たちが、カミング・アウトの問題に悩んできた。

●Aさん：

【一部分にはしている。】

●Bさん：

【周りで、カミング・アウトをして後悔してる友人もいる】

●Fさん：

【数人の友人にカムアウトして受け入れられたが、実弟には大きな障害となった。】

【多分ゲイに関して嫌悪感をもっていた弟にはその後理解しあうことはありませんが、友人達とは更に深い人間関係を維持しています。】

●Iさん：

【家族以外にはカミング・アウトしています。】

●Jさん：

【友人の一部のみにした事があります。】

●Kさん：

【していない。】

【好きな人に告白する形で知られたり、その人と共通の友人に相談する形で話したことはある。】

●Lさん：

【人による。家族にはしていない。】

●Nさん：

【現在に至るまでカミング・アウトはしていない。】

12人の研究協力者の人たちのなかで、どの人にも対してもカミング・アウトをしているという人は、EさんとGさんくらいであろう。他の人たちは、カミング・アウトをする相手を選んでいる。このことを<選択的カミング・アウト>とよぶことにしたい。

ここで重要なことは、性的指向性の<真の受容>に至ることができたからとって、その人が、だれにでもカミング・アウトをするというわけではけっしてないということだ。ただし、その逆はありえないだろう。すなわち、みずからの性的指向性の<真の受容>なしには、カミング・アウトはありえないのだ。

<選択的カミング・アウト>をする基準というものがある、それぞれの人たちにあった。殊

に、Jさんは、試しにカミング・アウトしてみ  
るということを行っている。

● Jさん：

【私は、Gについて知識の無い人にカミング・アウトする時は私の人となりをよく知っている人に対してするのがスムーズなのかと思った訳です。今はLGBT関連書籍などの武器も多いので、聞く耳と考える頭があれば更にいいかなとも考えました。】

【カミング・アウトする場合、人の話を聞く耳と理解しようとする頭がある相手でないとなんと面倒臭い事になると考えるからです。】

【カミング・アウトしたい気持ちで少しだけ実験した事がありました。始めは後腐りないように成人学級の人にカミング・アウトしてみました。手応えが悪かったです。】

● Lさん：

【相手に偏見がないであろうということがなんとなくわかり、結婚の話やどんな女性かタイプという話題がふられたりしたときに、きっかけとして言おうと思っています。】

Vの2のiiiにおいて、ほんとうに同性愛者なのかどうか、みずからの性的指向性を試してみ  
るという確認の行動や、性的指向性をみずから  
変えようとする行動を<実験的行動>として定  
義したが、ここで、カミング・アウトをしても  
大丈夫かどうか安全かどうかを確認するために  
1回試してみるという確認の行動も<実験的行動>  
に含ませることにする。

(2) 家族にカミング・アウトをすることの  
特殊性

ところで、Iさん・Jさん・Lさんのように、  
親しい友人にはカミング・アウトをしたり、K  
さんのように、必要最低限の範囲内でカミング  
・アウトをしたりしているものの、親をはじめ  
とする家族にはカミング・アウトをしていな  
いという人たちが存在する。

エレニョ（前掲書）が、この問題を取り上

げており、フィリピン人の同性愛の青年たち  
は、学校ではカミング・アウトをしているのに、  
家庭ではカミング・アウトをしていない、その  
理由を調査・研究している。そして、フィリ  
ピン人の同性愛の青年たちが家族にカミング・ア  
ウトすることができない理由として、3つをあ  
げている。1つめは、家族、とりわけ両親の「高  
い期待(High Expectations)」である。そこには、  
男性にしる女性にしる、同じ性の人とではなく  
反対の性の人と関係をもつべきであるという社  
会の信念が影響しており、この基準に従わない  
のは、その人物のイメージおよび両親の育て方  
が反映しているためであると信じられていたと  
いう。2つめは、家族から「拒絶されることへ  
の恐怖(Fear of Rejection)」である。これは、  
同性愛者という自分の本当のアイデンティティ  
を明かすやいなや、自分に対する家族の待遇が  
変わってしまうのではないかと、さらにはカミ  
ング・アウトをしたことを否定され、反発され  
てしまうのではないかと不安な気持ちである。  
フィリピン人の同性愛の青年たちは、両親  
の「高い期待」ゆえに、「拒絶されることへの  
恐怖」を感じるのだという。自分たちの存在が  
両親を失望させるおおもとなるのではないかと  
恐れ、自分たちのセクシュアリティが家族に  
恥辱と不名誉をもたらすのではないかと思うか  
らである。そして、3つめが、「混乱の感情  
(Feelings of Confusion)」である。これは、フィ  
リピン人の同性愛の青年たち自身が、将来に  
おいて自分たちがどうしたいのか、すなわち、同  
性愛者のままでいたいのか、あるいは異性愛者  
になりたいのか、そのことについて半信半疑の  
気持ちがあるからだという。

家庭ではカミング・アウトをしていないのに、  
学校ではカミング・アウトをしていることにつ  
いて、エレニョ（前掲書）は、やはり3つの  
理由をあげている。1つめは、仲間たちの親密  
さや同性愛に対する開かれた心から生ずる「仲  
間に対する愛着 (Peer Attachment)」である。  
2つめは、「受け入れてもらえたという感情  
(Feelings of Acceptance)」である。この感情が、

自己疎外や家族からの拒絶を遠ざけてくれるのである。そして、3つめが、「本当の自分でいられること (Being True to One's Self)」である。抑圧された感情を仲間たちには表現することができるからだ。だが、このことは家庭ではできない。

家族に対して同性愛者というみずからの本当のアイデンティティを隠そうとすればするほど、友人たちには心を開こうと思うのである。それは、相手の反応を心配せずに本当の自分で表現することができからであり、そのようなことは家族のまえではできないからである。そして、この根柢には、社会的な相互依存性というフィリピン人の国民性があるようだ。

筆者の研究においても、エレニョの研究結果と同様のことが認められた。

● Gさん：

【カミング・アウトする時、両親や兄がどういう態度を取るか非常に恐ろしく、不安でした。】

● Iさん：

【歩くカミング・アウトな私ですが、家族も多分気づいているとは思いますが恥ずかしいというか、友達以上に嫌われたら怖いっていう気持ちがあるのです。】

● Jさん：

【カミング・アウトしたい気持ちと、した後に色メガネで見られるのではないかと、親ならがっかりさせるのではないかとこの気持ちの両方がありなかなか出来ません。】

● Kさん：

【家族は社会的規範や常識を重んずる人なので、理解されないと。友人も、自分が性愛の対象だと思って離れていく気がする。職場は（すでに退職しているが）自由な雰囲気ではなかった。】

● Lさん：

【もう長年築き上げられた関係を今更わざわざ言ってしまう変えたくないからという感じ。】

【母親が生きていれば言おうと思っていたけど、死んでしまったし、お父さんもお兄ちゃんも、深い家族関係からは距離あるし、多様性とか受け入れる柔軟性に乏しい感じなので、わざわざ言ってまで…という感じですね。】

それでは、家族に対して、カミング・アウトをした場合には、どのようなことになるのだろうか。

Aさん・Dさん・Gさんのように、家族に対して、実際にカミング・アウトをした人たちも、すぐには家族に受け入れてもらえないようだ。そこで、もし兄弟姉妹がいる場合や、親しくしている親戚がいる場合には、まずそちらにカミング・アウトをし、手ごたえを感じてから、次に、親にカミング・アウトをするという段取りをとるようだ。

● Aさん：

【母親が財布から情報を抜き取っていた(実際に彼の名字を言ってきた)り、「好きなら学費くらい言えば出してくれるよな」とか言い出してきたり、まあ、強烈なのは「育て方を間違えた」と言われたコトですね。その後、友人たちと出かけて友人宅に泊まらせてもらった時も、「本当かね」と疑いだし、友人に電話を代わったりとか、変にギクシャクしました】

● Dさん：

【兄にまずしたのですが、その時の返事は「やっぱり」でした。(笑)私は兄弟の仲がいい方なので、これはきっと受け入れてもらえると思っていました。両親にしたのはそのずっと後ですが、母親は意外に「あら、そう、いろいろあるんじゃない」とすんなり受け入れました。が、父親はまずいったん、話をした次の朝に「昨日のことは聞かなかったことにしよう」と言われました。その時はそのままにしましたが、のちに手紙のやり取りをする際に、流れでこのこと

に言及する段になり、今回は顔を見せない分互いに辛辣な内容をつきつけるようになって、一旦は文面上で勘当するかという言葉も出ました。その後も根気強く自分の思いを伝え続けたところ、最終的には父親も受け入れてくれるようになりました。その後の反応でいうと、実は父親の方が真摯に理解してくれていたようです。父は、「自分は親戚にどう伝えればいいのか？」ということで悩んでくれたりしていましたが、母親はその後も時折「あなたの孫も早く見たいわね、」と無邪気に言って見せて、父に睨まれたりしてました。私のパートナーを「大切な友人」と紹介した時も父の方から、まず、Dをよろしく、と言ってくれましたが、母はしばらく「本当にいいお友達」扱いでした。受け入れ方もいろいろです。今では二人とも深く理解してくれていると思います。】

●Gさん：

【カミング・アウトする時、両親や兄がどういう態度を取るか非常に恐ろしく、不安でした。まず別に暮らしていた兄に電話で打ち明けたのですが、僧侶でもある兄は「何と言っていいかわからないが、お念仏だけは捨てるなよ」と言ってくれました。母はレズビアンを知り合いがいたので多分そんなにショックは受けないだろうと思っていましたが、父の反応が大変心配でした。しかし母はもちろん父も、しっかり受け止めてくれて、一緒に泣いてくれました。さすがに伊達に何年もお坊さんをやっていないあと、父のことを改めて尊敬しました。】

次に、BさんやLさんが次のように書いていることに注目したい。

●Bさん：

【カミング・アウトをされた受け手のことを考えると、必ずしも聞いて楽しい話ではなく、する側の自己満足のように思える】

●Lさん：

【家族なのに、大事なところがつながれない寂しさ。家族なのに、見えない透明な厚い板でふさがれている哀しさです。】

永易至文は、同性愛の子どもをもったことに対する親の立場からの複雑な心境を綴ったものを、手記というかたちで紹介している。ここに、その一部を引用する。

「あのとき息子は、私に淡々と話をしました。私は黙りこんでしまいました。理解できない。そんなこと、ありえる理由がない。正直言葉が見つかりませんでした。ただ、私の気持ちが完全に崩れていったことを、今もはっきりと覚えています。受け入れられない。私の夢が消えた。平凡でいい、普通の息子であってほしい。と同時に、息子がかわいそうであまらなくなっていきました。私は孤独に陥り、黙々とそのことばかりを考える日々になっていきました。驚き、体裁、偏見、息子に対する申し訳なさ。なにがそれほどまでに私の心をしめつけるのか。私は思い切って姉に相談してみました。「落ち着いて考えてみて」と言われました。「なんでもないことよ。みんな堂々と生きているじゃない。有名な作家の人もそうでしょ。普通だよ。そんなことで悩まないで。」そう言われても、一人、受け入れられない私がいました。一中略—1年が過ぎ、私はある電話相談をきっかけに、同じ立場でありながらそんなことは普通のことだよと言える人びとに巡りあえました。自分のことなのに、本すらも買いに行くことができなかった私。本も送っていただきました。5冊も読み、いろいろなことを知ることができました。今、同じ個性を持つ子どもさんのお母さん、当事者本人との交流会にまで出かけるようになり、そこでまたたくさん勇気、優しい気持ち、いろいろな体験談を聞かせていただきながら、この壁を乗り越えようと自分なりに頑張っています。息子の告白により大切なことをたくさん知ることができま

した。一人では生きられないこと。息子もきっと私の知らないところで私のようにいろいろな人たちに支えてもらいながら生きてきたに違いないということ。今の私は、支えてくださった皆さんに感謝することだけです。(ゲイの母 60代)」(永易, 2014, p. 14)

カミング・アウトの問題は、カミング・アウトをする側にとっても、される側にとっても、超がつくほどの難問である。Lさんのように、【家族なのに、大事なところがつながれない寂しさ】や【家族なのに、見えない透明な厚い板でふさがれている哀しさ】を味わわないようにするには、家族に対しても、「あるがままの自分」すなわち<素(す)の自分>でいる必要があり、それには、家族にカミング・アウトとすることが一番の解決策となる。ところがその一方で、カミング・アウトをされることによってひき起こされる、家族(とりわけ両親)の側の失望や落胆、悲しみや怒りなどを慮ると、カミング・アウトをすることには、ためらいが生じるのである。

このように、カミング・アウトの問題は、常に同性愛者の人たちにつきまとう、直面せざるをえない問題である。とりわけ、あと継ぎの問題は、同性愛者の人たちにとって尽きない悩みであることは、BさんやGさんが次のように書いていることからわかる。

●Bさん：

【嘘を付くのは良い気分はしませんが、カミング・アウトをして、ショックを受けさせるわけにはいかず、仕方ない、それで良いのだと思います。ただ、親に孫の顔を見せてあげられないのは申し訳なく思います。】

●Gさん：

【父は後継ぎがいなくて今でも現役で住職をやっており、とても申し訳なく思っています(兄は別の寺の住職をやっており、簡単には戻ってこれられないようです)。悩みは尽きませんね。】

iv. カミング・アウトを超えて

ところで、Eさんのように、周囲の人たちにカミング・アウトをするという性的指向性の受容段階から、さらに一歩前進して、次なる段階として、性的指向性にこだわらない生き方を探る段階に達している人もいるようだ。

●Eさん：

【社会の中でよりよく生きていくためには、性別やセクシャリティはそんなに関係ないと思ったから。】

【カミング・アウトをすることで、自分のことを相手にたくさん語れるから。ゲイが身近にいることを実感してほしいから。】

この段階では、Eさんのように、同性愛者はけっして稀有な存在ではなく、身近にいてることをみんなに知ってもらいたいから、積極的にカミング・アウトをしていこうとする。自分が同性愛者であることを公表している芸能人や、地方議会の議員などは、この段階に達しているものと考えられる。<sup>12)</sup>

v. 日本人男性同性愛者の性的指向性の受容過程に関する理論仮説

ここまでの議論を整理する。以下に記述するように、筆者の研究から導き出された、日本人男性の同性愛者の人たちの性的指向性の受容過程は6段階となる。

●第1段階：<性への目覚め>の段階

同性愛者の人たちが異性ではなく同性に性的魅力を感じるようになるのは、その時期の早い人で、幼児期からであり、遅い人で思春期においてであった。このうち、幼児期から同性に性的魅力を感じるようになる段階を<性への目覚め>の段階とした。そして、思春期から同性に性的魅力を感じるようになった人たちは、次の<仮の受容>の段階に含めることとする。なぜならば、そこには性に対するいわばあどけなさはもうすでになく、みずからの性的指向性について、ひとまず認めるのか、それとも認めない

のかの選択にすぐに迫られるからだ。ただし、幼児期に自分が同性に性的魅力を感じた人でも、それを明確に同性愛として同定するには、やはり思春期を待たねばならない。

●第2段階：性的指向性の〈仮の受容〉の段階

次に、思春期に入ると、同性愛者の人たちは、みずからの性的指向性に関して、「自分はどこがちがう」「自分は変じゃないか」というふうに関心と周囲との齟齬をきたしはじめ、自分の性的指向性が異性ではなく同性に向いているということ、ひとまず「自覚」する状況へと追い込まれる。性的指向性の〈仮の受容〉の段階であった。

●第3段階：〈異質である不安〉と〈正体が知れる不安〉を感じる段階

自分が異性にはなく同性に性的にひかれるということ「自覚」する〈仮の受容〉の段階に進むと、異性愛が当然とされる異性愛中心主義の社会においては、〈異質である不安〉を感じたり、〈正体が知れる不安〉におそわれたりして、それゆえに「異性愛者の役割葛藤」を演じなければならなくなる。さらに、〈男らしくない男の子症候群〉の同性愛者の人たちは、この「男っぽくない・男らしくない」ところが、そのまま「同性愛者（オカマ）である」と判別されることの悲しみや、自分が同性愛者であることが顕現してしまうのではないかという不安を感じる。

●第4段階：性的指向性の〈真の受容〉の段階（〈異質である不安〉を解消する段階）

同性愛者の人たちは、〈異質である不安〉を解消するために、〈パッシング〉や〈連帯〉の戦略を採用する。同じ性的指向性をもつ人間が、自分以外にも実在していることを知り、同性愛者は稀有な存在ではないことがわかり、同性愛者の人たちは勇気づけられる。また、①〈前向き思考〉と、②〈哲学的な・スピリチュアルな思考〉、および③〈周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用〉によって、〈異質である不安〉をはじめとする閉塞状態を打開し、〈否定的自己感〉から〈肯定的自己感〉

へと変化する。そして、「あるがままの自分」すなわち〈素（す）の自分〉でいることのたいせつさを感じるようになる。それと同時に、同性愛者の人たちはみんな、「しかたがない」「どうしようもない」という「あきらめの気持ち」すなわち〈諦念〉をいだく。ここに、〈素（す）の自分〉だけは、変えたくとも変えようがないという〈諦念〉が存在することになる。みずからの性的指向性の〈真の受容〉の段階とは、〈素（す）の自分〉でいいのだと思えるようになることであるといつてよい。

●第5段階：〈選択的カミング・アウト〉の段階（〈正体が知れる不安〉を除去する段階）

その次に、みずからの性的指向性を周囲の人たちに打ち明けるといふ、カミング・アウトを行う段階へと至る。これは、〈正体が知れる不安〉をできるかぎり除去しようとする行動であった。そして、性的指向性の〈真の受容〉なくしては、カミング・アウトの問題は起こりえない。自分の性的アイデンティティが不安定なのに、そのことを、確実性をもって他人に告げることなどできないからである。ただし、このカミング・アウトの問題は、同性愛者の人たちをおおいに悩ませる。そのため、〈選択的カミング・アウト〉という方法が採用される。筆者の研究では、ほとんどの協力者の人たちがこの段階に留まっているものと考えられるし、ひいては、ほとんどの同性愛者の人たちもこの段階に留まっているものと推測される。

それから、同性愛者の人たちのなかには、ほんとうに同性愛者なのかどうか、みずからの性的指向性を試してみるという確認の行動や、性的指向性をみずから変えようとする行動、そして、カミング・アウトをしても大丈夫かどうか安全かどうかを確認するために1回試してみるという確認の行動をとったりする人たちもいることがわかったが、本研究ではこの行動を〈実験的行動〉として定義した。

●第6段階：〈カミング・アウトの超越〉の段階

さらに一歩前進して、性的指向性にこだわらな

い生き方を探る段階に達している人もいる。この段階にいる人は、同性愛者は身近かにいるということをみんなに知ってもらいたいがために、積極的にカミング・アウトをしていこうとする。

以上の理論仮説を図に表現したのが、31ページの図1である。また、12人の研究協力者の人たちのストーリー・ラインをもとに抽出されたさまざまな構成概念ごとに、どの構成概念にどれだけの人たちが該当するのかを分類し、整理したのが、32～33ページの表1である。

## VI. 今後の課題

今回の研究は、日本人男性の同性愛者を対象とした研究であった。理論的飽和がおきたとはいいながらも、しかし、性的マイノリティの研究となると、男性の同性愛者（ゲイ）だけではなく、女性の同性愛者（レズビアン）、そして両性愛者（バイ・セクシュアル）の人たちをも含めなければ、より一般的な・精緻な理論を構築することはできない。この点において、筆者の研究は、男性の同性愛者（ゲイ）を対象をしばっているため、しかも、12名というごくわずかのデータを分析し、理論仮説を導き出した

ため、一般性・客観性に欠けるきらいがある。

また、キャスやトロイデン、あるいはエレニョなど、海外で行われた研究と、今回の筆者による（日本で行われた）研究とを比較したところ、男性同性愛者の性的指向性の受容をめぐることは、共通点もあれば相違点もあった。たとえば、キャスやトロイデンの記述のなかには、〈諦念〉という概念は認められず、日本独自の現象であると思われる。また、カミング・アウトをするにあたり、家族にはそれがなかなか行えないという、エレニョによって明らかにされたフィリピンの事情は、日本と場合とよく似ているとの印象をもつ。より一般的な・精緻な理論の構築をめざすには、日本国内ばかりでなく、海外の状況との比較研究も進めていかなければならないだろう。

## 謝辞

本論文は、東京国際大学大学院臨床心理学研究科博士課程（前期）の修士論文として執筆し、提出したものを、紀要への投稿用にコンパクトにまとめたものである。このような機会を与えてくださいました妙木浩之先生に衷心よりお礼を申し上げます。

## 注

- 1) SCATを用いての具体的な分析結果は、津野(2016)の巻末の資料を参照していただきたい。
- 2) 小児性欲に関して、小此木啓吾は次のように述べている。

「フロイトは口愛欲求だけでなく、この口愛期に引き続いて小児の成長に伴ってあらわれてくる肛門愛、男根愛という三つの発達段階を区分し、これらを小児性欲と総称した。」(小此木啓吾, 2002, p. 230)

すなわち、小児性欲とは、厳密に定めるならば、フロイトでいうところの男根期までをさし、次の潜伏期は含まれないことになるが、本研究においては、潜伏期も小児性欲に含めることとする。このことは、小此木もまた、次のように述べていることから、誤りではないことがわかる。

「フロイトはさらに、思春期における第二次性徴のあらわれ、いわゆる「性の目ざめ」

をもってはじまる大人の性欲を性器性欲と呼んで、小児性欲と区別した。つまり小児性欲は、性器性欲以前 (pre-genital) の性欲である。」(前掲書, p. 231)

- 3) ここでの【革新】は【確信】の誤り。Eさんも後に、そう訂正している。
- 4) ノンケとは、異性愛者のことを指す。同性愛者から見て、同性愛の「ケ」(その気)がない人のことを示す隠語。「非…」「不…」「無…」などを意味する接頭辞の「non」と、「(その)気」を合わせたものであり、「同性愛の気がない」→「non気」→「ノンケ」となった。
- 5) Mさんの場合は、さほど「異性愛者的役割葛藤」に悩まされることはなかったようだ。ただし、これは、周囲の環境が、「異性愛者的役割葛藤」を感じさせない環境であったことが幸いしたためであり、異性愛中心主義のより強い環境では、Mさんも「異性愛者的役割

葛藤」に悩まされた。

●Mさん：

【同性愛者ということで、日常生活で困ったことはほとんどありません。】

【実家では、両親の仲があまり良くなかったこともあり、結婚についてとやかく言われることはありませんでした。】

【会社でも未婚の年上同僚も多く、上司ですら50代で独身だったので、結婚に関して口を出されることもなく、気楽に過ごせています。】

【父方実家に住んで、子どもを設けて家を継げ、と言われた】

したがって、Mさんの場合もけっして例外ではないといえる。

- 6) <降伏 (Capitulation)>とは、同性愛行動を回避することである。しかしながら、同性愛感情を抱きつつも、それを行動に移さないままであることは、自己嫌悪感や絶望感を味わうことにつながる。
- 7) <激化 (Minstrelization)>とは、自分自身の真に属する集団からかけはなれている場面において、軋轢を避けるために、大衆文化によって彩られる線に沿って、つまりは大衆文化に迎合するやりかたで、非常に型にはまった、ジェンダーには不適當なやりかたで、自分自身を演じてみせるやりかたのことである。
- 8) <パッシング (Passing)>とは、異性愛者のふりをする・異性愛者を装うことを意味する。この<パッシング>の戦略を用いるということは、すなわち、「異性愛者的役割葛藤」を演じるということである。
- 9) Jさんの場合は、<連帯>の戦略を採用したことに加えて、特殊な方法で、みずからの性的指向性を受容していった。その特殊な方法とは、厚生労働省など国が進めるキャンペーンを知ったことである。これによって、Jさんは、同性愛者としてのみずからの存在感を得ることができた。とりわけ、【勤めていたエリア内の会社員達ほぼ全員(約100人)に私達は“エイズ!”と差別的な表現で呼ばれたJさんにとって、厚生労働省が進めるHIVエイズ感染予防に関する活動はとても心強かったのであろう。

●Jさん：

【付き合っていた彼からこう言われた時です。「自分を否定しちゃうダメ、ありのままの自分を認めることが大事だと思うよ。」と、彼とこの気持ちを共有することが出来たことにより、私は精神的に非常に楽になりました、人生観が変わった、大きな脱皮をしたような記憶があります。】

【ある時、当時の厚生省(厚労省?)が行っているHIVエイズ感染予防に関する活動を知り、Gの存在がちゃんと社会に認められているものと知ったため。】

つまり、当時つきあっていたパートナーの励ましのことばによって、Jさんの「否定的自己感」は「肯定的自己感」へと1回目の変化をとげ、厚生労働省など国が進めるキャンペーンによって、2回目の変化をとげたわけである。

- 10) Iさんが、世間一般の男性・女性とは異なる性区分を独自に設けることによって、性的指向性の受容にともなう混乱を解決したことは、めずらしい。

●Iさん：

【性別：〇〇みたいな感じだった】

【性別：〇〇と言う事が確立されている】

※〇〇には、Iさんの実名が入る。

もちろん、Iさんがみずからの性的アイデンティティを確立していくうえで、「自分の場合は、どう立ちむかえばよいのか、どのようにむきあったらよいのか」という葛藤や苦闘から、Iさんは独特の対処の方法として、世間一般の男性・女性とは異なる性区分を独自に設けたのだといえる。だが、その一方で、男性・女性とは異なる性区分にこだわるよりも、それを超越して、<素(す)の自分>でありたいと願う気持ちのほうが強く作用したために、男性・女性とは異なる性区分を独自に設けたのだともいえる。

- 11) みずから望んで同性愛者だと告白することを「カミング・アウト」ということは周知のとおりだが、その一方で、同性愛者だという秘密を他人にばらされることを「アウトティング」という。
- 12) 石川大我さん(東京都豊島区議)や石坂わたるさん(東京都中野区議)、上川あやさん(東京都世田谷区議)といった人たちがいる。

## 文献

- Cass, V. C. (1979): "Homosexual Identity Formation: a Theoretical Model" *Journal of Homosexuality*, Vol. 4, No. 3, pp. 219-235.
- (1984): "Homosexuality Identity Formation: Testing a Theoretical Model" *Journal of Homosexuality*, Vol. 20, No. 2, pp. 143-167.
- 土居健郎 (1976): 「オモテとウラの精神病理」 荻野恒一編『分裂病の精神病理4』東京大学出版会.
- Duberman, M. (2002): *Cures: A Gay Man's Odyssey* Westview Press, the United States of America.
- Ereño, J. R. (2014): "Playing it straight: A Phenomenological Study of Filipino Homosexual Adolescents who are "Closeted" at Home but are "Out" at School" *International Journal of Gender and Women's Studies*, Vol. 2, No. 1, pp. 105-119.
- Freud, A. (1965): *Normality and Pathology in Childhood: Assessments of Development*, The Hogarth Press, London. / 牧田清志・黒丸正四郎 (監修), 黒丸正四郎・中野良平 (訳) (1981): 「児童期の正常と異常」『アンナ・フロイト著作集9』岩崎学術出版社.
- Freud, S. (1905): "Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie" / 渡邊俊之 (訳) (2009). 性理論のための三篇『フロイト全集6』岩波書店.
- 日高庸晴 (2000): 「ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する研究」『思春期学』Vol. 18, No. 3, pp. 264-272.
- (2006a): 「第1回性的指向と異性愛者的役割葛藤」『保健師ジャーナル』Vol. 62, No. 7, pp. 580-583.
- (2006b): 「第2回生育歴と自殺未遂」『保健師ジャーナル』Vol. 62, No.8, pp. 660-663.
- 日高庸晴・木村博和・市川誠一 (2007): 「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」成果報告『厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業——ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2』厚生労働省エイズ対策研究事業.
- 堀田香織 (1998): 「男子大学生の同性愛アイデンティティ形成」『学生相談研究』Vol. 19, No. 1, pp. 13-21.
- Isay, A. R. (1996): *Becoming Gay* Vintage Books, the United States of America.
- 石川大我 (2009): 『ボクの彼氏はどこにいる?』講談社文庫.
- 石丸徑一郎 (2008a): 『同性愛者における他者からの拒絶受容——ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ』ミネルヴァ書房.
- (2008b): 「性の多様性モデル」『臨床心理学』Vol. 8, No. 3, pp. 336-340.
- 梶谷奈生 (2008): 「女性同性愛者のセクシュアリティ受容に関する一考察」『心理臨床学研究』Vol. 26, No.5, pp. 625-629.
- Levay, S. (1996): *Queer Science: The Use and Abuse of Research into Homosexuality*, MIT Press, the United States of America. / 伏見憲明 (監訳), 玉野真路・岡田太郎 (訳) (2002): 『クィア・サイエンス 同性愛をめぐる科学言説の変遷』勁草書房.
- Lozano-Verduzco, I. (2015): "Desire, Emotions, and Identity of Gay Men in Mexico City" *Psychology of Men & Masculinity*, March 23, pp. 1-46.
- 室井舞花 (2016): 『恋の相手は女の子』岩波ジュニア新書.
- 中村 明 (2010): 『日本語 語感の辞典』岩波書店.
- 永易至文編 (2014): 『わが子の声を受け止めて性的マイノリティの子をもつ父母の手記』平成26年度厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業.
- 及川 卓 (1982): 「性別同一性の障害——男性同性愛者の症例をとおして——」馬場謙一 (編). 『青年期の精神療法』金剛出版.
- 小小木啓吾 (2002): 『フロイト思想のキーワード』講談社現代新書.
- 大谷 尚 (2008): 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案——着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』Vol. 54, No. 2, pp. 27-44.
- (2011): 「SCAT: Steps for Coding and Theorization——明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法——」『感性工学』Vol. 10, No. 3, pp. 155-160.
- Troiden, R. R. (1989): "The Formational of Homosexual Identities" *Journal of Homosexuality*, Vol. 17, No. 1-2, pp. 43-73.
- 津野千文 (2016): 「男性同性愛者における性的指向性の受容過程に関する研究」東京国際大学

大学院臨床心理学研究科博士課程（前期）修士論文。  
 山内俊雄編著（2004）：『改訂版 性同一性障害の基礎と臨床』新興医学出版社。

Zuger, B. (1984): "Early Effeminate Behavior in Boys: Outcome and Significance for Homosexuality" *Journal of Nervous and Mental Disease*, Vol. 172, No. 2, pp. 90-97.

資料

男性同性愛者における性的指向性の受容過程の理論仮説	各段階にみられる特色と注意事項
第1段階： <性への目覚め>の段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 思春期に入ってから同性に性的魅力を感じるようになった人たちは、次の第2段階からスタートする。</li> </ul>
↓	
第2段階： <仮の受容>の段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>● みずからの性的指向性をひとまず「自覚」する。</li> <li>● &lt;振り子の状態&gt;</li> </ul>
↓	
第3段階： <異質である不安>と<正体が知れる不安>を感じる段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「異性愛者の役割葛藤」を演じる。</li> <li>● &lt;男らしくない男の子症候群&gt;</li> <li>● &lt;実験的行動&gt;</li> </ul>
↓	
第4段階： <真の受容>の段階 (<異質である不安>を解消する段階)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● &lt;パッシング&gt;と&lt;連帯&gt;の戦略の採用</li> <li>● ①&lt;前向き思考&gt;・②&lt;哲学的な・スピリチュアルな思考&gt;・③&lt;周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用&gt;による解決</li> <li>● &lt;否定的自己感&gt;から&lt;肯定的自己感&gt;への変化</li> <li>● &lt;素(す)の自分&gt;と&lt;諦念&gt;</li> </ul>
↓	
第5段階： <選択的カミング・アウト>の段階 (<正体が知れる不安>を除去する段階)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 家族にはカミング・アウトを行えない特殊性がある。</li> <li>● ほとんどの同性愛者の人たちが、この段階に留まっているものと考えられる。</li> <li>● &lt;実験的行動&gt;</li> </ul>
↓	
第6段階： <カミング・アウトの超越>の段階	

図1 日本人男性同性愛者の人たちの性的指向性の受容過程

表1 各構成概念に対する研究協力者12名の状況

No	概 念 名	A さん	B さん	D さん	E さん
1	<性への目覚め>	◎	—	◎	◎
2	思春期で同性に性的魅力を感じる	—	◎	—	—
3	<振り子の状態>	×	×	◎	×
4	性的指向性の<仮の受容>	◎	◎	◎	◎
5	<異質である不安>を感じる	△	×	◎	◎
6	<正体を知れる不安>を感じる	◎	◎	◎	◎
7	<男らしくない男の子症候群>	×	×	×	×
8	<否定的自己感>をいだく	◎	×	◎	×
9	<諦念>をいだく	◎	×	○	◎
10	性的指向性の<真の受容>	◎	◎	◎	◎
11	<パッシング(Passing)>の採用	◎	◎	◎	◎
12	<連帯(Group Alignment)>の採用	◎	◎	◎	△
13	<前向き思考>	◎	◎	△	◎
14	<哲学的な・スピリチュアルな思考>	×	×	◎	×
15	<友好的な・寛容的な環境の作用>	△	△	◎	◎
16	<選択的カミング・アウト>をする	◎	×	◎	◎
17	<カミング・アウトの超越>	×	×	×	◎
18	<実験的行動>をとる	×	×	◎	◎

注1) 協力者の人たちが実際に書いている項目には◎を、実際に書いてはいないものの、文脈から読み取れる項目には○を、不明の項目には△を、協力者の人たちが否定して書いている項目には×を付した。

注2) 1の<性への目覚め>と、2の思春期で同性に性的魅力を感じる は、本研究の定義では、おたがいが両立しえない概念になるため、該当しない項目のほうには「—」の記号を付した。

Fさん	Gさん	Iさん	Jさん	Kさん	Lさん	Mさん	Nさん
◎	◎	—	—	—	◎	—	◎
—	—	◎	◎	◎	—	◎	—
△	◎	×	◎	○	×	×	×
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	◎	◎	◎	×	◎	◎	△
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	◎	×	◎	×	◎	×	×
◎	×	◎	◎	×	◎	◎	×
◎	△	◎	◎	△	◎	○	◎
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	◎	△	◎	◎	◎	◎	◎
◎	△	◎	◎	△	◎	◎	◎
△	○	◎	△	△	×	×	△
×	◎	×	×	○	×	×	◎
◎	◎	◎	◎	×	◎	△	◎
◎	◎	◎	◎	×	◎	◎	×
△	×	×	×	×	×	×	×
×	◎	×	◎	◎	×	×	×



**Abstract**

## **On Study on an Acceptance Process of Sexual Orientation in Japanese Gay Men**

Chibun Tsuno

The purpose of this paper is to clarify an acceptance process of sexual orientation in Japanese gay men and to hypothesize theoretically about it. These days of the information society, today even more than in the past, LGBT people seem to be living in a more comfortable environment. It is said, however, that almost all of Japanese gay men have been undergoing and are undergoing heterosexual role conflict and depression. An original questionnaire to survey was prepared, and 12 subjects participated in this study. E-mails were used in order to exchange data between each subject and the author, and SCAT was utilized for analyzing all the collected data qualitatively. As a result of analyzing them with SCAT, it turned out that most Japanese gay men would go through six stages in accepting their own sexual orientation. But, supposedly, most of them might stay at the fifth stage, namely the stage of coming out selectively.